

2013年度

ファカルティー・ディベロップメント活動報告

東京基督教大学

はじめに

2013年度は、倉沢正則学長が学長職二期8年を務められた集大成の年であった。1980年の三神学校の合同以来目指してきたのは、大学院を有する大学としての東京基督教大学を建学するということであった。2013年度は、大学院博士前期課程最初の修了生を生み出し、大学院博士後期課程が認可された正に節目となる一年であった。

2013年度のFD活動は、継続すべき重要課題や新しい課題に取り組みつつ、授業改善のためのPDCAサイクルの展開を図った。学生による授業評価および教員の相互評価を継続しているが、今年度はファカルティーフォーラムにおいて、ペアを組んだ岡村・井上教員により授業相互評価についてのプレゼンテーションが行われ、この取り組みが活性化された。

また、伝統的教会音楽と現代的なワーシップソングをいかに統合するかという現下の課題も、ファカルティーフォーラムで取り扱った。初めて開催した紀要合評会では教員による活発な批評および討議が行われて、教員の研究によき刺激が与えられた。

夏の教員研修会では、岡村教務部長が「神学部学生の主体的な学びについて」をテーマに講演を行った。その他、「学修ポートフォリオについて」をテーマとして森教員によるワークショップ、FD研修会「大学等における男女共同参画推進セミナー」への職員派遣を行った。精神ケア学び会も学生部を中心に継続中である。

世界的な新約学者であるリチャード・ボウカム博士を迎えて、「The “Individualism” of the Gospel of John」（ヨハネ福音書の「個人主義」）をテーマに特別講演会を持つことができたことも、2013年度のFDとして特記すべき事項である。

学部長（FD委員長） 大和 昌平

目 次

ファカルティーフォーラム（6月4日）	1
「教会においてワーシップソングと伝統的教会音楽をどのように統合したらよいか」	
講演 佐佐木ジョシュア	
応答 大和昌平、宇内千晴	
教員研修会（8月28日）	19
「神学部学生の主体的学びについて」	
講演 岡村直樹	
ワークショップ「学修ポートフォリオについて」（10月22日）	29
担当 森 恵子	
第17回精神ケア学び会報告書（3月5日）	33
ファカルティーフォーラム（3月14日）	35
授業改善～授業相互評価・自己点検評価より～	
発表 岡村直樹、井上貴詞	
学科・専攻会議～卒業前アンケート・面談より～	
学生による授業評価アンケート（2013年度）結果・講評	43
授業改善のためのPDCAサイクル・2013年度FD活動一覧	53
付録（案内ちらし）	54
特別講義（6月19日）	
‘The “Individualism” of the Gospel of John’（ヨハネ福音書の「個人主義」）	
講演 リチャード・ボウカム	
ファカルティーフォーラム（10月1日）	
「紀要合評会」	

2013年度 東京基督教大学
第1回ファカルティーフォーラム

**教会においてワーシップソングと
伝統的教会音楽を
どのように統合したらよいか**

**2013年6月4日(火)
16:40-18:00**

大会議室 (本部棟2階)

講師 ジョシュア佐佐木先生
(ワーシップ!ジャパン学長、本学非常勤講師)

応答 大和先生、宇内先生

参加対象 教職員

主催 ファカルティーディベロップメント委員会
(担当職員：虫明)

講演

佐佐木ジョシュア

初めまして、佐佐木ジョシュアと申します。よろしくお願いたします。まず私のバックグラウンドから。

私は音楽大学に行く前はロックンローラーになりたかったのですが、大学に行き始めてからオペラと出会い、オペラに真剣にとりくむようになりました。そして師匠を訪ねてイタリアに留学し、プロ活動をしていました。その後ニューヨークで歌手として活動をしていました。ニューヨークにいる時に、劇場ではなくて主にお仕えしたいと思い、教会の音楽主事として働くようになりました。どちらかと言うとクラシック畑から出てきた人間ですが、ニューヨークで音楽主事をし始める頃から、ゴスペル音楽に興味を持つようになり、ゴスペル歌手としても活動するようになりました。クラシックとゴスペル活動、どちらにも足を突っ込んでいますので、私としては、伝統的な教会音楽と、コンテンポラリーなワーシップソングにあまり差はなく、自分の中でも融合されているので、なんとなく今日の様なタイトルを見ても、ピンと来ないところがあります。実際に伝統的な教会音楽を使っている教会、あるいは、そういう音楽が好きなタイプのクリスチャンと、そうではなくて、コンテンポラリーな音楽が好きなタイプとの間で論争があることも知っていますし、音楽が元で教会が分裂したという話もよく耳にしました。それはすごく悲しいことだと思います。教会音楽の論争は世界中にあると思いますが、調べてみると、どの論争にも共通したところがあります。それは、聖書から離れたところから始まっている、ということです。私たちは聖書を土台として、教会の礼拝について、教会音楽について考えなくてはいけないのです。

礼拝と音楽

そもそもワーシップソングという言葉ですが、直訳すると「礼拝歌」です。よく地方の教会の先生から電話があり、「うちの教会もワーシップを導入したいのだけれど、どうしたらいいのだろう」と尋ねられます。教会がワーシップを導入するというのはどういうことだろうか、と悩みましたけれども、新しいコンテンポラリーな音楽のことを「ワーシップ」と言う呼び名で置き換えているのだなと思います。これは日本の教会独特の間違った外来語の使用の仕方かと思います。あくまでもワーシップソングは礼拝で用いる歌です。これは伝統的な音楽となんら変わりはなく、讃美歌も聖歌も、大きなくくりでいえば、福音歌、ゴスペルソングであり、ワーシップソングであり、プレイズソングなのです。

アメリカで音楽主事をしているときに、急激に成長している教会に研修に行く機会がありました。その時に、いくつかの教会に共通していることがありました。教会に集っている信徒の一人ひとりが、賛美を通して礼拝をささげている、という意識が強い、ということです。“Let's Worship!”と言って音楽が始まる。そして、その賛美の中に豊かに臨在してくださる主と交わって礼拝をささげている。そういう信仰を目の当たりにしました。そして、私はそれが鍵なのではないかな、と思うようになりました。どちらかと言うと、プロテスタントの教会はみことば中心、メッセージ中心で、それは、ものすごく大切なことですし、教会はそこが中心でなければいけないと思います。しかしこれは、クリスチャンが神から受けるものであると気がつきました。それとは反対に、賛美をささげるといのは、私たちから神様に対する積極的な、能動的な、いわゆるささげる礼拝になるのではないかと思いました。どちらかが重要でどちらかが重要ではない、ということではなくて、受ける礼拝、ささげる礼拝、この二つがそろって主との交わりが完成するのです。

賛美と臨在

Ⅱ歴代誌5章12節にはこのようにあります。

また、歌うたいであるレビ人全員も、すなわち、アサフもヘマンもエドトンも彼らの子らも彼らの兄弟たちも、白亜麻布を身にまとい、シンバル、十弦の琴および立琴を手にして、祭壇の東側に立ち、百二十人の祭司たちも彼らとともにいて、ラッパを吹き鳴らしていた—ラッパを吹き鳴らす者、歌うたいたちが、まるでひとりでもあるかのように一致して歌声を響かせ、主を賛美し、ほめたたえた。そして、ラッパとシンバルとさまざまな楽器をかなでて声をあげ、『主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで』と主に向かって賛美した。そのとき、その宮、すなわち主の宮は雲で満ちた。祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった。主の栄光が神の宮に満ちたからである。

アサフ、ヘマン、エドトン、これは今でいうと、クリス・トムリン、マイケル・W・スミスといった有名なワーシップリーダー、礼拝全体をリードする立場の人たちだったのではないかと解釈することができます。その周りにレビ人がたくさん集まって、多くの楽器を手にした120人の祭司たちもそこにいました。そして会衆と共に心をひとつにして、あたかも一人であるかのように主に向かって賛美をささげました。その時に雲が満ちました。すなわち、主の宮の中に主の栄光が満ち溢れて、人々がそこで動くこともできなくなった、そういう情景です。私たちが礼拝をささげるとき、賛美をささげるときに、この情景を心に留めて賛美をささげる必要があるのではないのでしょうか。歌の中で礼拝をささげていくということは、ただ歌を歌って、自分のことばを吐き出してればいいということではなく、神様との交わり、神様とそこで出会う、その体験を期待して、主の臨在を目的として賛美をささげていく必要があるのです。私たちが信じる神様は、旧約時代も、今も、そしてとこしえに変わることがないお方ですから、こ

の時に現してくださった臨在を、今も、教会で、私たちが集まって、あたかもひとりであるかのように一致して声をあげたときに現してくださる、そういう主であるということを、私たちは信仰を持って、賛美していく必要があるのです。キーワードは「あたかもひとりであるかのように」というところだと思います。これは、ユニゾンだったという学者もいますが、ひとりであるかのように、ただひたすら心を主に向けて賛美をささげていった、そういう情景ではないかと思います。主の臨在を求めるワーシップというのが、私たちが目指すべき賛美の領域だと思います。伝統的音楽も、コンテンポラリー音楽も求めるところは同じです。その音楽の中で、私たちがどのように礼拝をささげているのかが重要なポイントであり、音楽スタイル、音量など枝葉末節のことは関係なく、音楽そのものはどちらでも良く、音楽を使う私たちがどういうスタンスで、その音楽を用いて、主に賛美をささげていくのかということが、一番重要なポイントだと思います。

ワーシップソングと伝統的な音楽の議論のおおもとは何かと考えることがあります。一つの結論として、コンテンポラリーな音楽を使って演奏している若者たちの演奏技術が未熟である、というのがあげられます。伝統的な教会音楽を使っている教会でも、ヨーロッパのオルガニストたちや、アメリカのピアニストたちと比べて技術的に劣るところがあるのではないかと考えています。第2歴代誌に書かれているレビ人たちは、祭司職に聖別された民族でした。彼らは他の人たちのように年貢を納めることは免除され、人々が納めたもので養われていました。そして、祭司としての教育を受けていました。特に特筆されるのは、彼らは子どもの頃から超一流の音楽教育を受けていたということです。ですから、彼らは音楽的にハイレベルであった。彼らが会衆をリードし、あたかもひとりであるかのように、心をひとつにして賛美をささげる。会衆の中心に立って、リードしていたということは、私たちが今、心に留めておかななくてはならない要素ではないかなと思います。

私は日本で、藤原歌劇団などクラシック音楽と同時にゴスペル音楽の団体の責任を持たせていただいています。音楽文化に対する教会の役目は、あまり果たされていないような気がします。ヨーロッパやアメリカでは、教会が音楽文化を下支えしています。日本の教会は、賛美だからという言い訳で、技術を高めることを放棄し、優しい雰囲気、ニコニコ笑いながら歌っていればそれでいいと思っている。礼拝をささげるということは、私たちが持てるものを全てささげなければならないと思いますので、この辺もこれから考えていかなくてはいけないことだと思います。

賛美と犠牲

Ⅱ歴代誌 29 章 25 節をお開きください。

さらに、彼は、ダビデおよび王の先見者ガド、預言者ナタンの命令のとおり、レビ人にシンバルと十弦の琴と立琴を持たせて、主の宮に立たせた。この命令は主から出たものであり、その預言者たちを通して与えられたものだからである。こうして、レビ人はダビデの楽器を手にし、祭司はラッパを手にして立った。そこで、ヒゼキヤは全焼のいけにえを、祭壇でささげるよう命じた。全焼のいけにえをささげ始めた時に、主の歌が始まり、ラッパがイスラエルの王ダビデの楽器とともに鳴り始めた。全集団は伏し拝み、歌うたいは歌い、ラッパ手はラッパを吹き鳴らした。これらはみな、全焼のいけにえが終わるまで続いた。

旧約時代の全焼のいけにえをささげるときの情景です。不思議なことに全焼のいけにえをささげ始めた時に音楽が鳴り始めて、いけにえをささげ終わるまでそれが続いた、と書いてあります。つまり、いけにえがささげ始められた時から終わるまで、音楽は続いていたのです。旧約聖書には何度かいけにえと賛美の関係が出てきていますが、それが顕著な箇所です。

新約時代に生きる私たちにとって、全焼のいけにえは何か、ということを考える時、まず、イエ

ス・キリストということです。イエス・キリストは私たちを罪から救うために全焼のいけにえとなって完全に焼ききられてしまう。跡形もないような、そういう状況になるまで自分を貶めてくださった。そして、いのちを投げ出して私たちを罪から救ってくださった。

二つ目ですが、今、神様が私たちに求めておられるのは、私たち自身をイエス・キリストに似た者として、イエス・キリストのように全焼のいけにえとなることを神様が求めておられるのではないかと思います。私たちが、全焼のいけにえをささげ始める時から終わる時まで、賛美が続いている、そういう情景がここに示されているのではないかと思います。私たちが賛美をささげる、礼拝をささげるということは、日曜日の礼拝のとき、あるいは、水曜日、木曜日の祈祷会のとき、あるいは伝道集会や聖会のとき、そのような特定の時間だけでなく、私たちがイエスを信じて、主にお仕えして、お従いして、私たち自身を全焼のいけにえとしてささげ始めたときから、私たちがこの地上の人生が終わるときまで、一天国に行ったらそれがずっと続くかもしれません—ずっと賛美が続くということを中心に留めておかなければならないと思います。音楽スタイルがどうのこうのという世界ではなくて、私たちがクリスチャンとして生きていく、そのものが賛美でなければいけない。

ローマ書 12 章 1 節には「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」と書いてあります。「霊的な礼拝」というと、何となく神秘主義的な感じがしますが、決してそうではありません。私たちの体、つまり私たちの実存全て、全身全霊を神に喜ばれる生きた供え物としてささげる、ありのままを、その現実をささげていくということが霊的な礼拝であるというふうに、聖書は教えていると思います。つまり私自身をささげる、これこそが礼拝である。

私たちがイエス・キリストを信じて、主に全てをおささげしますと思った瞬間からささげはじめ、ささげ終わるまで賛美が続いていく、これが私たちの賛美のスタンス、スタイルではないかと思っています。

最前線の賛美

私たちは賛美をささげる時に、よく「賛美奉仕は、霊的戦いの最前線である」と口にします。その時の心について、歴代誌の20章の記述から学んでみたいと思います。第2歴代誌20章には、ヨシャパテ王の時代のことが記されています。ユダの民が周りを強い連合軍（敵）に囲まれていました。その時にユダの民は、全滅必至、そういう中で、ヨシャパテ王の命令で国民全員が断食をして祈りました。そこで、神様のことばが彼らに下りました。

ユダのすべての人々とエルサレムの住民およびヨシャパテ王よ。よく聞きなさい。主はあなたがたに仰せられます。『あなたがたはこのおびただしい大軍のゆえに恐れてはならない。気落ちしてはならない。この戦いはあなたがたの戦いではなく、神の戦いであるから。

このことばは、非常に慰めに満ちた言葉です。神様の戦いである限り、私たちは負けないであろう、と信じたと思います。けれども、同じ神様から次のことばが与えられました。「あす、彼らのところに攻め下れ」。つまり、この戦いは、神の戦いであるけれども、明日攻めていくのは、私たち人間。人間的にどう考えても勝つことはできない、そういう状況で彼らは引き続き祈ったのではないかと想像します。そこで、中心的な人たちが集まって相談し考えた戦術は、とんでもない戦術でした。

まず、主に向かって歌う者たち、聖なる飾り物を着けて賛美する者たちを任命した。彼らが武装した者の前に出て行って、こう歌うためでした。「主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで」

まず、彼らを選んだのは、主に向かって賛美をささげる歌うたいたちでした。彼らの任務は、聖

なる飾り物をつけて、武装した者たちの更に前へ行き、歌うということでした。賛美奉仕者が、霊的な戦いの最前線に立つ、その時の心積もりがどの程度のものであるのかということをおぼろげに思われます。賛美の勇者として任命を受けた人たちは、どのような思いで次の日の最前線に出て行ったのかということをおぼろげに思われます。最前線に行くといっても、本当の戦いの最前線ですから、殺し合いをしている戦いの最前線で丸腰で聖なる飾り物をつけて、しかも、大きな声で歌いながら飛び出していくわけですから、敵にとっては、かっこうの餌食です。実際、敵は、彼らに向かって、矢を向けて来るでしょう、石つぶてが飛んで来るかもしれない。つまり、彼らは任命を受けたその瞬間に、死を覚悟しました。次の日、最前線に出て行く。もう二度と愛する人たちのところに帰ってくることはできないかもしれない。陣営に戻ってくることはないかもしれない。けれども、勝利を信じて最前線に立って行く。これが神から与えられた戦法です。その結果、ユダの民は、自分たちからは何も攻撃をしなかったけれども、連合軍が相打ちを始め、バラバラに崩れ去って全滅し、ユダの民に大勝利がもたらされました。聖書には、残念ながら最前線に出て行った賛美の勇者たちが、陣営に戻ってきたかどうかは記述がありません。けれども、私たちが最前線に立って、主に賛美をささげていくということは、この時の賛美勇者の思いを持って現場に出て行く必要があるのではないかと、強く思われています。私たちは本当の最前線にいる、そういう賛美者であるということをおぼろげに認識して賛美をささげていくことが必要であると思っています。

また、霊的戦いの最前線がどこにあるのか、ということが明確ではない場合が多いと思います。特に気をつけなければならない最前線があります。それは、特別に祝福された日曜日の礼拝であったり、特別に祝福された集会であったり、そういう「特別」が落とし穴になる、ということ。そこが、霊的戦いの最前線だということをおぼろげに認識しておく必要があります。つまり、サタンが一番破壊したい、

一番嫌う、一番阻止したいのは、私たちが心から賛美をささげ、真の礼拝をささげる、その場所をサタンは狙ってきます。しかも、この攻撃は、漫画で出てくるような怖そうな顔をしたものではなくて、狡猾な方法を用いて攻撃してきます。私たちが一番攻撃されるのは、コンテンポラリーの音楽を使う人たちと、伝統的な音楽を使う人たちとの間に溝を作り、論争させ、分裂させる。分裂しない場合は、どちらもお互いの顔を見ながら、賛美に力がなくなってくる。そういう状況をサタンは狡猾に作り出していきますので、気をつけてなければいけません。

音楽の種類と礼拝音楽

教会の礼拝の中で用いる音楽には色々なタイプの音楽があります。グレゴリアンチャントや、バッハやヘンデルの曲もあれば、ミサ曲、カンタータ、レクイエム、オラトリオ、ジャズ音楽、黒人霊歌、コンテンポラリー音楽、そして、現代はロックやヒップホップのような形でも、主に礼拝、賛美をささげています。そのどれもが、ただの音楽になってしまったら、あっという間にサタンに持っていかれてしまう、そういう危険性を持っています。私たちが教会音楽について語るときに必ず、ひとりの礼拝者として、その音楽を用いて主に礼拝をささげていく、という根本的なメッセージを心の中心に据えてしていかなければいけないと思います。

実際にどのように伝統的な音楽とコンテンポラリー音楽を統合していけばいいのか、私にはわかりません。ひとつだけ言えることは、コンテンポラリーの中にも、良い音楽もありますが、なくてもよい音楽もあります。讃美歌の中にも未だに使われている素晴らしいメロディーのもあれば、使われなくなってしまったものもあります。そのところを吟味する必要があると思います。もっと言うならば、コンテンポラリーの中で、たとえばパイプオルガンの伴奏にも耐えられるようなメロディーラインを持っているものもありますし、讃美歌の中に、ロックで演奏しても OK という曲



もあります。そういう意味で、創意工夫というものをしていく必要があります。

また、礼拝で音楽を用いていく奉仕は、ものすごく大変なミニストリーだということを知っておくことです。日曜日は年間 53 回あります。しかも、会衆が毎週一緒です。これはすごい状況です。例えば、オペラでは、長くても 7~8 回、短いと 1~2 回で終わります。お客さんは回毎に違います。けれども、教会の場合は毎週同じ人が来る。しかも、本番は 53 回ある。礼拝が 1 時間半あるとしたら、約 4 割は音楽が流れています。それを教会の音楽奉仕者は準備をしなくてははいけない。選曲して、準備して、合わせをして、本番です。本番が終わったと思ったら、情け容赦なく 7 日後には本番があります。これは本当に大変な仕事です。一流の音楽家が年間何本くらいの本番をこなすと思いますか？ 100 本コンサートをこなす人は、きりきり舞いだと思います。50 本でもかなり一流でないとかこなすことはできません。喜ばしいことに、日本全国に 8,000 もの教会があるということです。ローソンより少し少ないくらいです。この数の教会で、毎週一回素晴らしい音楽で神様に礼拝をささげていく、そういう状況が繰り返し広がられていったら、どれだけ多くの人こそ

こに足を踏み入れるようになるかなと思います。けれども、年間 53 回の主日礼拝の音楽を、きちんとマネージメントしていくことは大変です。

私が日本に帰ってきて、ワーシップジャパンという音楽神学校を始めた理由のひとつは、人材が必要であるということ。教育された人材を派遣して、地域で教会に仕え、教会の音楽をしっかりとマネージメントしていく必要がある、そういう思いがありました。11 年目を迎えて、卒業生はまだ 100 人ですから、8,000 教会という数を考えると、全く足りていません。皆で力を合わせて、教育された人材を派遣していかなければいけないと思っています。日本にはたくさんの聖書学者、メッセンジャーがいますが、教会に仕える音楽家というのは本当に少ないです。これが、今日の中心テーマになると思いますが、伝統的なものとコンテポラリーのもの、それをきちんとマネージメントして、サウンドを構築したり、バランスを取ったりとか、そういったことのできるマネージメント能力のある教会音楽家はまだまだ少ない。

それからアレンジ能力。一時期ヒルソングというオーストラリアの教会の音楽が流行りました。CD が全世界で一年間に 200 万枚も売れました。CD を聞くと、ロック的な部分やメロディアスな部分がありますが、いつも、1-2 曲、伝統的な讃美歌や聖歌とコンテポラリーな賛美をドッキングさせて、かっこよくアレンジしています。そういうことは、音楽的なスキルを持っていないと簡単にはできません。アレンジ能力や、その他、色々な楽器のことを理解していなければならない。そのようなことができる人材を急いでたくさん生み出していかねばいけないと思います。

また、演奏の自由さ。トラディショナルな讃美歌は、こういうふうには歌わなければいけない、こういうふうには演奏しなければいけない、という縛りを外し、リニューアルして、次の世代にバトンタッチできるような、そういう音楽に成長させる、そんな感覚も必要なのではと思います。一つの根拠として、ヨーロッパの讃美歌はハーモニーや伴奏譜がついていない場合が多いです。メロディー

ラインだけが書いてあるので、伴奏はどうするかと言うと、すべてオルガニストに任されており、即興演奏です。自由に伴奏をする。そして、その時の霊的な雰囲気に応じて、伴奏が変わっていく。今日の伴奏と明日の伴奏は違う。このように教会音楽には自由があるということを知ってほしいと思います。

中田羽後先生が編纂された『聖楽集』というのがありますが、そこのはじめにコメントが書いてあります。中田先生がニューヨーク留学中、大きなクルセードがあり、ある歌手の伴奏を、上手な方が即興演奏で、歌のムードに合わせてされたそうです。それが素晴らしかった、と。日本にはまだそれだけのピアノの技術を持った人がいないかもしれない。しかし将来は、そういう人を期待している、というようなことが書いてありました。私はそれを見た時にすごく嬉しくなりました。先人が作った楽譜が権威を持ち、こういう弾き方をしなければならない、四声体をピアノやオルガンで弾いて、かちかちの賛美になっている、これが現実です。本来はそうではなく、あくまでも四声体で書かれている讃美歌、聖歌というのは、アレンジができない場合の基本的なパターンであって、それを工夫してもっと自由に、もっと素晴らしいものに変化させて、よりよいものを神様にささげていくというのが教会音楽の基本ではないかなと思います。コンテポラリーな賛美と言っても、2-3 年経ったら古くなります。いわゆるプレイズ & ワーシップというのは何十年も前から歌われていますが、今、日本で新しい曲と言われているのは、30 年くらい前のものといわれるほど、移り変わりが遅いのですね。何でもかんでもアメリカのものが良いわけではありませんが、アメリカの讃美歌の改訂版が出るスピードは 4 年に一回です。商業ベースにのっているもので、きっちり改訂されます。日本の場合は、『讃美歌 21』の出版前は、長い間『讃美歌』を使用していました。そうすることによって『讃美歌』が権威を持ってしまったのだと思います。しかも、黒い革表紙。それがキリスト教の音楽のコーラン、キリスト教の

音楽の正典のような感じがしてしまった。でも、それは間違いだと思います。讚美歌がいくら革張りの讚美歌集であったとしても、その音楽には権威がなくて、あくまでも礼拝のために用いる。その思いをきちっと皆にシェアしていく必要があるのかなと思っています。私が語りたことは、そういうことです。

これは、少しテーマから離れますが、日本に帰ってきて十数年になります。多くの教会を巡回伝道させていただきました。そこで、何度も同じ言葉を聞いてがっかりします。それは「私には賛美の賜物がありませんから」という言葉です。皆さん、音楽の才能がないということを、クリスチャン用語で言っているだけだと思いますが、賛美の賜物がない、ということは絶対にない、ということを感じていただきたいと思います。賛美の賜物というのは、聖書の中には言葉としては出てきません。主は、この地上の人生を礼拝の人生、そして、主を賛美する、そういう人生に変えてくださるために、私たちを救ってくださったわけですから、その私たちに、賛美の才能を与えておられないということは絶対にない、私は信じています。何とかそういう人たちを励ましたいと思って、聖書を学んでいる時に、マタイ 25 章、いわゆるタラントのたとえのところにつかりました。主人が旅に出る時に、あるしもべには 5 タラント、あるしもべには 2 タラント、あるしもべには 1 タラント預けて旅に出、5 タラント預かった人は、それを元手に一生懸命商売をして、成功し 10 タラントにして主人に返しました。主人は「よくやった。良い忠実なしもべだ。主人の喜びをともに喜んでくれ」と言われた。2 タラント預かったしもべも必死にビジネスをし、4 タラントにして返した。1 タラント預かったしもべは、その 1 タラントを少なくしたら、主人に怒られると思って、それを隠したままにしておき、主人が帰ってきたときに、「これが、あなたから預かった 1 タラントです」と言って返した。そうしたら、主人は怒って「なまけものだ」と。そして、1 タラントを取り上げて、5 タラントもっていたしもべにあげてし

まったという、そういうたとえ話です。5 タラントというのは、今の日本の価値で言うと 3 億円くらいです。2 タラントは 1 億 2 千万円ほど、1 タラントは 6 千万円くらいですね。神様が私たちに与えるタラントと言うのは、1 円 2 円というレベルではなくて、一番少なくとも 6 千万円ですから、大盤振る舞いでタラントを与えてくださっているのだということが、心にしみてきました。賛美するための才能は、すでに与えられている。あとは私たちにゆだねられていて、私たちが用いていく。必死になって用いていく時に、それを何倍にも祝福してくださるのが神様なのだ、という信仰を持てるようになりました。与えられているにもかかわらず、与えられていないと思ひこみ、それを使わないと、それは大変なことになります。完全に無くなってしまうかも知れない。けれども、神様は特に賛美に対して、すでにたくさんの賜物を私たちひとりひとりに必ず与えてくださっているということを信じて、どんどん用いていっていただきたいと思います。5 タラントを預かったしもべも、それをを用いる時には、恐れをなしたと思います。大きな金額を預かっている。預かってそのままだったら傷つかずにすむかもしれないけれども、それをを用いてビジネスをするということは、度胸もいるし、学ぶ必要もあるし、研究もしなくてははいけない。用いるというのは、そういうことだと思います。必死になって働いて、倍になったのだと思います。もちろん神様は、そこに祝福を与えてくださいましたけれども、3 億円与えられて、それを 6 億円にするというのは、生半可なことではないと思います。私たちに与えられている才能も、それほど大きいものが与えられているのですから、祝福をいただくために、その才能を花開かせるために、必死になって学んで、努力して、用いて欲しいと思います。

コンテンポラリーな賛美と伝統的な賛美がけんかをしている暇は、今はないと思います。日本全国の 8,000 の教会が一丸となって、心からの賛美、心からの礼拝を主にささげていく、そのことが今一番、私たちに求められていることだと思います。

ます。

私がワーシップジャパンでモットーとしていつも語っているのは、礼拝こそ伝道の最前線であるということです。私たちが伝道をするときに、特に最近の若いミュージシャン志望のクリスチャンたちは、ライブハウスでライブをやって、そこにノンクリスチャンがたくさん来て、クリスチャンミュージックを歌って伝道した気持ちになっています。もちろん、それもひとつの伝道だと思いますが、もし、ライブハウスや音楽業界でやっていくのであれば、私はそういうミュージシャンに対しては、そっちの方で大成功してください、そのために何かヘルプできることはヘルプします、とアドバイスします。それも伝道の入口、一つだと思います。しかし伝道の大道は、クリスチャンが集っている礼拝に友人、知人を誘ってくる。そして、真の礼拝をささげている。その礼拝の中で、主ご自信が彼らにタッチしてくださって、主と出会う。それが伝道の大道だと思います。そのためには、私たちクリスチャンが、誘いやすい礼拝の形を作っていかななくてはいけない、と思います。そのために、音楽というのはものすごく重要なポイントです。例えば、映像や照明、サウンドシステム全てのものを、整えていかなければいけないと思います。今の人たちは、いいものを聞き、いいものを見て、いいものに触れています。ですから、教会でもっといいものを、そして、教会に来て違和感がないものを、そして、もっと言うならば、クリスチャンが、「うちの教会はすばらしいからぜひ来てください」というような、人を誘いやすいようなところを提供する。そのために、教会音楽のクオリティ、奉仕者のクオリティを徹底的に上げていただきたいなと思います。礼拝に来ることによって、そこで救われる魂が起こされていくということを実践していただきたいと思います。ありがとうございました。

ディスカッション

司会：ありがとうございました。2つの質問をさせていただきます。ロック志望であられた先生が、なぜ、この道に導かれたのか、また、コンテポラリーの音楽とオペラの音楽とのギャップについてお聞かせいただければと思います。

佐佐木：もともと私は、音楽と関係ない世界で生きていました。ずっと空手をやってきましたが、17歳で腰を故障し、空手が出来なくなり、不良になりました。その中で、暴走族のリーダーなどをしていたのですが、当時の不良はロックンロールを聞きました。ラジオから流れるチャック・ベリーの「ジョニー・B. グッド」が、私の初めての音楽体験でした。それまではずっと空手でしたから、道場での詩吟の唄と先輩たちの演歌しか聞いたことがないので、衝撃を受けました。音楽ってかっこいいなと思って、国立音大に入って、初めて聞いたキリエエレイソンも、同じようにかっこいいと思いました。ロックとクラシックの境目が自分の中にはありませんでした。そういう中で、マリオ・デリ＝モナコ（テノール歌手）の歌をレコードで聴き、私もこんな声になりたいと思って、オペラを一生懸命勉強しました。しかし、劇場より教会で歌が歌いたくなり、教会音楽主事になりました。しかしクラシック音楽を正確に演奏させるだけの力のある人材を日本の教会が持つのは難しいと思いました。それで、何かいい方法がないかと思った時に、コンテポラリーな賛美はわりと手軽で、メロディーラインも簡単。そこらへんで融合できないかと。教会に集う人たちはクラシカルなものが好きですし、一般の人たちも教会でロックと言うイメージはあまりないと思い、クラシックやコンテポラリーな要素を絡めながら、何かできないかなというふうに考え

ていました。

司会：先生の出身の教会は高松の JECA と伺いました。少しだけ触れていただければと思います。

佐佐木：ロックに興味を持った時に、英語の壁にぶつかりました。ある日、新聞を見ていたら、教会でやっている英会話のチラシが入っていました。そこで、ダニエルという宣教師に会って、導かれて洗礼を受けました。そこが、私の母教会です。けれども、ダニエルがアメリカに帰ってしまい、私もあつという間に離れてしまい、10年くらいふらふらしていました。オペラ歌手をしている時に、大きなキリスト教の集会で、歌うことを頼まれて行きました。そこで、皆が大きな声で祈っていたのですね。自分も真似しないと偽者だということがばれてしまうと思い、一緒に祈ろうとした時に神様に捕らえられて、涙があふれてしまいました。ずっと放蕩をしていたわけですが、2つのことが口から出ました。ひとつは「神様ごめんさい」、もうひとつは「イエス様はここにいてくれたのですね」、ということでした。そこから色々なことが変わって行きました。1993年11月6日の出来事でした。

応答

大和 昌平

ありがとうございました。私は1972年頃、高校時代に教会に導かれて信仰を持ちました。ちょうど、山内修一さんが「友ようたおう」というのを始めた頃で、最初からそれを歌っています。高校生がギターを弾く楽しい集まりがありました。振り返ると、それがあったから行けたというのがあります。

今回、先生をお迎えするというので、いくつかワーシップについて書いてあるものを読みまし

た。その中で、自分自身も、ワーシップソングが歌われる中で信仰が与えられたということを変えて振り返りました。その後、礼拝に出たのですが、そこではワーシップソングは歌われませんでした。その後、牧師になり、京都で25年間仕えていましたが、「プレイズ&ワーシップ」とかミクタムなどが出てきました。私自身が行き着いたのは『新聖歌』でした。讃美歌もあり、ワーシップもあり、いわば折衷案です。礼拝堂にはオルガンとピアノがあり、普段は、皆が起立して歌うという、いわば宗教改革の積極的な参加型の賛美を歌い、その中で、ワーシップソングも歌いました。『新聖歌』の中にあるワーシップをピアノとギターを弾いて歌いました。そこに至る経緯は、中高生たちは讃美歌がわからず、おじさんたちは、ワーシップがわからない。役員会の中では、自分たちもワーシップを覚えようではないかと、でも、彼らにも讃美歌を歌わせよう、ということになりました。今日のテーマにもあるように「いかに統合するか」ということを模索しながら来ました。

今は、この大学では「礼拝学」という授業で様々な先生方に話していただいて、多角的に礼拝学を学んでいます。学生たちの関心は、さまざまなスタイルの音楽をどう統合していくかということにあります。私にも答えはなく、学生たちには色々な話を聞いて、これからの時代の教会音楽を作っていくって欲しいと話しています。先生が「統合のしかたはわからない」とおっしゃいましたが、私も同じです。

これまでの教会の豊かな音楽の歴史があり、20世紀後半以降、世の中全体のコンテンポラリーな音楽があり、テープが出て、CDが出て、インターネットがあり、You tube、iTunesがあり、音楽は自分たちで作れる、という中で、どう学生たちに提示していけばいいのかなというのが、課題です。これまでの伝統的な賛美による礼拝は受身であって、コンテンポラリーな音楽を使う礼拝が、積極的、能動的ということになってしまうと、これまでのことが全否定になってしまう。先生は、先ほど、伝統的な音楽をコンテンポラリーの音楽

にアレンジしたい曲があるとおっしゃいましたが、そのための技術が必要だとおっしゃいました。ひとつは、時代が変わっても変わらないいい讃美歌を現代風にアレンジするというのはひとつの提案なのかなと思いました。これまでの教会が取り組んできたものを活かしながら、現代の人たちの音楽的な感覚に、どう橋渡しすればいいのかなということをお聞きしたいというのが感想です。そのようなことを改めて思わせられました。

佐佐木：先ほど申し上げた受身の礼拝ということは、昔のいわゆるトラディショナルな音楽が受身ということではありません。音楽の要素として、サウンド、つまり出て行く音の感じ、というのでしょうか、そういうものがあります。木造の教会にパイプオルガンを設置しても、ほとんどメンテナンスができず、大変な状況になります。しかし今のアーレン（アーレンオルガン社）とかロジャース（ローランド）などの電子オルガンは、内部はシンセサイザーです。サンプリングマシンです。最新技術でオルガンを作っています。教会で用いる音楽も、そういう感じだと思います。例えば、クラシックの演奏家はコンサートホールではマイクを使わずに演奏をしますが、大きな教会ではマイクを使い、サウンドをきちんとコントロールしてします。私は、曲の古い、新しいというのは、あまり意味がないと思っています。アレンジすることも必要ですし、アレンジをするためのスキルを持った人材を育成するというのも必要です。あとは技術を持ったサウンドエンジニアが必要だということも思います。

もう一つは、若い人たちが、讃美歌がわからない、好まないというのは、演奏の仕方が問題なのだと思います。若い人たちが皆ロック好きかといえば、そうではなくて、クラシックの好きな人、演歌が好きな人、色々な人がいます。ですから、もう少し踏み込んで、若い人たちに讃美歌を指導して教え込む。讃美歌のことばもしっかり教える、ということが必要なのではな

いかなと思います。教会が培ってきた伝統的な文化は、若い人たちに継承していく責任が教会にはあると思います。

15年ほど前、アメリカで音楽主事をしていた時に、当時70歳くらいの方に「この歌詞の意味はわかりますか」と聞いてみたところ「わからない」と。年配の人でも勉強しないとわからない、ということもあります。皆で一生懸命に勉強することが必要だと思います。

また今、童謡を歌う会というのが全国的に広がっていて、童謡コーラスの団体がたくさんあります。関西で3万人の会員がいて、去年東京に進出し、1年間で1万人になっている団体もあります。それほど、童謡を歌うシニアの人たちが増えてきています。童謡の元である讃美歌ももっと色々な方面でアピールしていくことによって、多くの人々がそういうものに触れやすくなると、その音楽の重要性が若者たちにもわかってくるのかな、と思います。

応答

宇内 千晴

今日はありがとうございました。先生のお話しを伺いながら、本当にそうだな、と頷くところが幾つもありました。クラシックとそれ以外の音楽ということにつきましては、私も境を定めておりません。極めて主観的ですが、どのようなジャンルの音楽でも良いものは良いですし、良くないものは良くないように思います。賛美歌の中にも何百年も前に書かれているのに新鮮に感じるものもあれば古臭いと感じるものもあります。

では、何をもちて音楽の良し悪しを判断するのでしょうか。私の場合は主に次の3つの点でそれらを判断しているように思います。ひとつは作品自体（メロディー・リズム・ハーモニーと言われている音楽の3要素を中心とする素材）が良い

かどうか、次にアレンジが良いかどうか、そして演奏が良いかどうかということです。しかし異層になります、私はそこに、もうひとつの点を加えたいと思います。それは音楽以前の問題です。人は音楽を聴くとき、物理的な音と同時に演奏者のメタメッセージも同時に受け取ります。どんなに素晴らしい作品、アレンジ、演奏であったとしてもそこに演奏者の「自分を認めて欲しい」という自己実現の手段を感じてしまうと、聴きたくなくなってしまうことがあります。つまり演奏者が音楽の邪魔をしているのかもしれないのです。私自身、演奏者として奏樂をする時、神の栄光を求めると言いながら、それをすり替えて自分の栄光を求めていることの方が多いように思います。そのような心の状態にあるということを実感できる時もありますし、自覚出来ない時もあります。きっとこれは、地上の生涯を終えるまでずっと抱えていく問題であろうと思っています。

先生は最初の方で、「主の臨在を求める賛美」とおっしゃいましたが「主の臨在を求める賛美」ということは、それを求めないと主はご臨在されないのでしょうか。

佐佐木：これは、神学的に色々な考え方があると思いますが、主が、いつも私たちの内におられ、いつも共におられる、ということは事実です。礼拝をささげるといった時に、その場所に主が豊かにご臨在くださる、ということ、心一つにして確認する時というのが礼拝だと思います。ペンテコステ系の人やカリスマティックな方々が、手を上げて歌っていますが、それも、いいことだと思いますし、必要なことだと思います。しかしそれよりも、私たち自身が、主がここに豊かに臨在を現してくださる、つまり、第2歴代誌に描かれているような臨在を、主が今も現してくださる特別な時として、信仰を持って賛美をささげ、礼拝をささげていく、そういう意味合いだと思っています。いわゆる、その時だけ主がそこに現れて、賛美が終わったらいなくなってしまう、そういうことではあり

ません。

宇内：ありがとうございます。先ほど先生は、第2歴代誌をいくつか引用してくださったのですが、たとえば、アモス書5章21節から24節、特に23節には「あなたがたの歌の騒ぎをわたしから遠ざけよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。」とあります。また、イザヤ書1章13節以降にも「もう、むなしいささげ物を携えて来るな。」とあります。主ご自身が、こういう香りはもうかぎたくないとか、こういう音はもう聞きたくないとか、礼拝そのものを拒絶するような記述があります。それにはそれなりの理由があったと思います。これらの箇所を読む時に、私たちは生まれ変わったクリスチャンなのだから、私たちがささげる礼拝を神様は無条件に全て喜んでくださるものだ、と思っ込んでいることはないのだろうか、と自己吟味することがあります。私が怖いと思うのは、繰り返しになりますが、神の栄光を求めると言いながら、実は自分の栄光を求めているという心のすり替えの状態です。例えばパイプオルガンですと、かなり大きな音も出ますので、ある程度の音楽的な技術を持つてれば、会衆賛美も華やかに盛り上げていくことが出来ます。それは音楽の持つ力ですし、それ自体は悪いことではないのかもしれませんが、しかしなぜそれをするのかというその目的が、皆が一つになってただ盛り上がることだけだとしたら、方向性が違うのではないかと思います。たとえば、主の小さき御声というのは、静かでないと聞こえませんよね。また、本当に主に出会い、恐れを抱いたとしたらヨハネの黙示録1章17節の「それで私は、この方を見たとき、その足元に倒れて死者のようになった。」という状態になってしまうのではないかと思います。そして主が本当に喜んでくださる礼拝というのは、果たして音楽が絶対になんかいけないのか、ときえ思うことがあります。特に耳が聞こえない人のことを思うと、そう思います。もちろん、聖書の

他の箇所では礼拝と音楽が、非常に強くリンクしていますし、楽器を含め音楽をもって主を賛美することが奨励されている箇所もあります。しかしその一方で、賛美歌やワーシップソングは、単純に歌えば神様は賛美として無条件に受け入れてくださるのでしょくか。私は、賛美として受け入れて下さるかどうかは神様がお決めになることであつて、私たちが決めることではないように思ひます。賜物を磨くということは重要なことだと思ひます。そのために練習し、勉強するのは当然すべきことです。しかし、神様がお覧になつてゐるのは賜物を磨こうとしてゐる人の心だと思ひます。そこは常に意識してゐなければならぬところだと思ひます。

先ほど私は、音楽についての良し悪しについてお話ししましたが、今度は歌詞を伴つてゐる作品について、歌詞の面から考えてみたいと思ひます。ここでは賛美歌、ワーシップソングに焦点を置いて考えてみますが、いずれの作品も歌詞を読んで原詞に問題があるのではないか、つまり聖書に照らし合わせてみるとおかしいのではないかと思ひることがあります。また訳詞に問題があるのではないかと感ずることがあります。歌詞というのは、何を歌うのかと申すことですから、その人自身の神様像とか礼拝観とか、賛美に対する考えがあらわにされるということだろつと思ひます。

また演奏として考えた時に違和感を覚えたことがあるのは、伝統的な礼拝式に於いては前奏の選曲や演奏法、賛美歌の伴奏の仕方などですが、ワーシップ系の礼拝では、ワーシップソングのリードの仕方です。折り返し部分を何度も何度も繰り返させることに違和感を覚えます。確かに歌詞の一部を繰り返すとそれを覚えますので、その歌詞を自分のものにしていく意味があると思ひます。しかし、日本語の訳詞の場合は、あまり重要でない歌詞を繰り返していることもあります。そしてこのやり方は、そこにいる人たちの心を恣意的にひとつの方向に持つていこうとする力を感ずます。このようなやり方は賛美をささげるときに必要なことなのでしょくか。この辺について、先生のお考えをお聞かせくたさい。

佐佐木：これは問題発言かもしれませんが、礼拝で演奏する音楽奉仕者は、自己実現なさつてもらつていいと思ひます。どんどん輝いて欲しいと思ひます。いくら輝いても神様の栄光に、その人がかなうはずはありませんが、神様の栄光を鏡のように反映させるならば、いくら輝いてもいいと思ひます。それで高慢になるならば、その役目はいつか終りが来ると思ひます。そういう形でとらえていつた方が、すつきりとアグレッシブに奉仕ができるのかなというふうと思つ



ています。心の中で色々と考えながら奉仕をささげていくと、どうしても思いっきりが悪くなったりしますので、御霊に満たされながら、ということをご指導しています。若い人たちは、自己実現をしないように、色々なことに注意しながら奉仕をするように、ということをご教会で教えられていて、結局、ワーシップジャパンに来た時に、申し訳ないけれど使い物にならない。何をやりたいのかわからない、若者たちになっています。そういうことではなくて、大胆に、力強く主にお仕えして欲しいと思います。ですから、色々な経験をして、成長していくので、どんどん自己実現をして欲しいなと思います。教会の中では、自己実現は否定的にとらえられていると思いますが、今の若い人たちに、自己実現ではなくて、神実現、自分を無にしてそれだけで練習に励みなさいというふうに教えた場合に、もちろん、自分を無にして主に奉仕することはすごく重要ですが、そういうふうに言っている私たちが、本当に無にして奉仕をしているかと問われたら、どうかと思います。私は、音楽奉仕をしている時に、色々考えています。完全に無になって奉仕をしているか、礼拝をしているかといえば、そうではなくて、会衆の様子を見ながら、色々考えていかなければいけないこともありますし、テクニカルな課題もあると思います。技術は高ければ高いほどいいです。そこは絶対妥協しないで欲しいところです。

教会で演奏される音楽は、最高のレベルのものが求められると思います。私のクラシックのキャリアの中で、超一流の演奏家とお付き合いさせていただくことが多かったのですが、皆、謙遜です。超一流で名前の売れている人で、高慢な人というのはあまり見たことがありません。その方々は、競争の中で戦ってきて、失敗でキャリアが終わるということを味わってきている人間ですから高慢になっている人はいません。ただ、教会には高慢な人が多いので、それは注意しなくてはいけません。ですから、教会も

競争をさせたらいいのだと思います。日本の教会音楽界では、競争が全くありません。競争して勝ちと負けがあつて、負けた人間はこれからどうしていくか、勝ったほうもいつか負けるかもしれない、そういう切磋琢磨のところが欠落して、何となく皆からほめられてちやほやされるような状況を作り上げていると、前進できないと思います。ワーシップリーダーに対しても、そういう意見を持っています。今、若い人たちの中から、優秀なワーシップリーダーが出てきましたが、まだまだ足りません。というのは、技術的なもの、学びの量、それらのものをもっとしていかなければいけない。高みを皆で目指していくということが必要になると思います。

もうひとつ、繰り返しで、ムードで盛り上げるということですが、それは今までにもありました。けれども、これも教会では引かれてしまっていますが、著作権の問題があつて、現在、ほとんどのワーシップソングは繰り返しをしません。アメリカやオーストラリアでも、繰り返しをしません。いわゆる売り物なのです。5分超えたら、2曲分の著作権料を払わなくてははいけません。日本の教会は著作権使用料を全然払っていませんので、そういうことはないのですが、そういう時代でもないということをご覚えていただきたいと思います。

あとは、教会の礼拝もメディアに載せる時代になっています。伝道のことを考えたら、メディアに載せた礼拝も必要だと思います。けれども、たとえば、テレビなら30分の番組におさめるということがあります。その時間内で終わるわけですが、それなりに計算された礼拝の形が必要になります。礼拝の形、音楽の形、色々なものがありますが、一番重要なポイントは、そこで、真の礼拝がささげられているかどうかということです。先ほど、宇内先生が、表面的にだけ整っていても、本質が問題であるとおっしゃっていましたが、まさにその通りで、礼拝するひとりひとりが、真の礼拝をささげているかどうか。もっと言うならば、他の人がどういう心の

状況で礼拝をささげているのかは、私にはわかりません。それをその人を信じ、主にだけ信頼して礼拝をささげていく、ということになると思います。ですので、できれば、大胆に今の若い人たちにご指導していただきたいなと思います。

宇内：先生は、説教者に何を求められますか？

佐佐木：基本的には十字架と復活、福音のメッセージです。私たちが罪人であり、十字架によって贖われ、復活によって永遠のいのちが与えられる、そのメッセージが繰り返し巻き返し、語られていることだと思います。もちろん、聖書の釈義、色々な箇所の説明をメッセンジャーは講解していく必要がありますが、私たちの必要は十字架と復活ですから、それがしっかりと語られるということが、重要だと思います。

宇内：もう一点だけ、言葉の問題です。「コンテンポラリー」という言葉自体にも、問題を感じています。それを訳すと現代音楽になり、クラシックの世界でも現代音楽はあるわけですし、その辺の言葉をどうしたらいいのか、私自身混乱しているところです。

佐佐木：本当のことを言うと、「ポップス系の賛美」とか、いわゆる「歌謡賛美」とか、ベタな方がいいと思いますが、確かに、コンテンポラリーと言うのは、無調音楽とかクロマティックだとか 24 音階だとか、いわゆる一般の人が聞いてもわからないような音楽ですので、それはそう思います。

宇内：無調などの難しい音楽だけでなく、天田繁先生や大竹海二先生のような現代に生きるクラシック系のクリスチャン作曲家もいらっしゃるので、そのあたりがすっきりすると良いなと思います。ありがとうございました。

司会：『讃美歌 21』に、日本人が作曲した讃美歌で、70-80 年代のメロドラマのテーマソングのような讃美歌があるのですが、それが泣けてきます。音楽と感性というのは面白い。

もうひとつの例ですが、ある教会に呼ばれて、日本の教会のグローバル化を語って欲しいと言われて、TCU での ACTS-ES チャペル（留学生が賛美のリードをする礼拝）の映像を流しました。最初、見られた皆さんはポカーンとしていたのです。そのうち、チャペルのパイプオルガンが映り、学生の姿が映って、ここは TCU のチャペルではないか、ということを知り始めて、特に TCU の卒業生は驚いていました。また、ある教会の方が、お孫さんご夫婦が新しいことを導入したいけれど、教会としてはおっくうで自由にできないという思いがあって、そういうことを許容している教会に移ってしまったという話をききました。おじいさんは痛みをかかえておられるのです。

今回のタイトルを選ぶときにも非常に苦労したのですが、コンテンポラリーとトラディショナルの二個対立になると分裂になるということを見事に指摘されていて、本当に重要なことだと思います。ではフロアーにオープンにします。

菊池：CIS(チャーチインフォメーションサービス)の統計を見ると、教会は二極化している。平均人数は 40 人だけでも、実は都会の非常に大きな教会と、他の何割かは平均 20 人くらいで、日本の 7-8 割の教会は本当に小さな教会で、奏楽者もままならない。そういうところで、これから教会音楽ということを考える時に、牧師の認識は非常に大事だと思います。もし、ここから牧会者として小さい教会に遣わされる方々のために、先生からの何かアドバイスがありましたら、お聞かせください。

それから、若い人たちも歳をとっていきますので、いつまでもロック調の賛美をしていくことはできないと思いますが、たとえば、日本人

が作曲した賛美などは、唱歌のように日本人の心に響いて残っていく、そういうものの可能性というのがあるのかなと思いますが、いかがでしょうか。

佐佐木：私が、セミナーなどで言うことは、それぞれの教会の音楽的レベルは牧師の音楽的感性以上にはならない、ということです。教会の霊的リーダーが牧師である以上、牧師の音楽的感性をよく磨いていただくとか、奉仕者を見抜く力であるとか、音楽奉仕者に対する見方をわきまえていくということが、重要なポイントであると思います。ある教会の例ですが、その教会に新しく赴任してきた牧師は、アメリカで勉強して帰ってきて、教会に音楽主事が必要だということをいち早く認識して、役員会で音楽主事を雇うことを提案しました。予算的な問題でそれは拒否されましたが、それでは、とその牧師は自分がもらっていた牧師給を全部その音楽主事に与えて、自分はアルバイトをしてつないでいきました。その後、どうなったかという、その教会はどんどん成長していきました。牧師自身に音楽の才能があるなしに関わらず、賛美の重要性をしっかりと認識しているということは、教会成長においては、有意義なものだと思います。

唱歌についてですが、今から 150 年前に日本にプロテスタントが入ってきて、その時に入ってきた宣教師たちは日本全国に散らばって行って、まずはミッションスクールを作り女子教育に力を注ぎました。その時に爆発的にヒットしたものが、讃美歌でした。それまではドレミファソを聞いたことがない人たちでした。その時に学んでいた女性たちにとっては、私たちがエルヴィス・プレスリーやビートルズを聴いたときのような衝撃とは比べ物にならないほどの衝撃であったと思います。

それで讃美歌が歌い始められて、日本政府があわてて、今の藝術大学の前身である音楽取調掛を設置し、日本で独自の歌曲を作っていかな

ければキリスト教にやられるぞ、と、森有礼などの音楽関係者をヨーロッパに派遣して、西欧音楽を研究させるプロジェクトが実行されました。しかし、彼らが学んだ音楽のほとんどは宗教音楽で、教会音楽の影響をしっかりと受けて、森有礼をはじめ優秀な音楽家たちはしっかりとクリスチャンになって日本に帰ってきて、唱歌を作りました。ですから、バックグラウンドから言うと、日本人の心を打つ唱歌は教会から発生したと言っても過言ではない状況です。私たちは、そういう音楽を日本の宝として、教会も含めて、しっかりと文化としてそれを守っていかなければならないと思います。

そして、今まで日本のプロテスタント教会が使ってきた『讃美歌』、『聖歌』も、良いものを文化として守っていく必要があると思います。現在、教会でバッハのカンタータで礼拝を守っているところはあまりないと思います。けれども、これは、音楽文化として絶対になくしてはならないものなので、コンサートホールで演奏されています。それと同じように、今は使わなくなってしまったかもしれないものであっても、教会はそれを手軽に捨てることはせずに、きちんと守っていく必要があると思います。

司会：伝統的な賛美とコンテンポラリーの賛美が対立をしてしまったのは、なぜなのでしょう。

佐佐木：これは、教会の問題ではなくて、音楽の問題だと思います。その音楽が好きか嫌いかということだと思います。実際、20代の好むワッシュアップソングと30代の好むワッシュアップソングは全く違います。趣味のことを真剣にとらえても仕方がないと思います。ただ、教会には、子どもから高齢者まで、すべての年代がそろっています。全ての人を満足させる音楽というのは、なかなか世界中見渡しても、見たことがありません。クラシックが好きな人はロックが嫌だったり、ロックが好きな人はクラシックが嫌だったり、ジャズが好きな人は、違う感性を持って

いたり、趣味の問題だと思います。教会が多様性をもって、どのように解決できるのか、何らかの形が必要だと思います。まず、論争の始まりが聖書から離れたところで、音楽の好き嫌いの話しではじまり、その後、中途半端なところから聖書が入ってきて、神学的な論争に摩り替わってしまうので、収拾がつかなくなってしまうのではないのでしょうか。

倉沢：先生がお話くださった中で、演奏の自由さということで、サウンド構築とかアレンジ能力とか、技術的な部分についてお話しされましたが、そのことが大事であると受け止めました。教会音楽はこういうものでなければいけないというのが、私たちの中には結構あるのではないかと思います。こうじゃなければいけないではなくて、やはり御霊には自由があるわけですから、それを受け止めていけるような牧師であったり、励ますようなリーダーシップが必要かなと思いました。

色々な音楽の素晴らしさがこの世界には満ちているわけですから、自由さをどこまで許容し、正しくキリスト賛美に導いていくことができるのかという見極めをするためには、色々なことに目を向けて知っていく必要があるということをお話しを聞いていて思いました。

佐佐木：詩篇 150 篇を見ても、様々な楽器が出てきて、かなりのサウンドで賛美をささげていると思います。楽器の種類も自由に選んでいいと思います。昔は教会に入れなかった楽器もあるようですが、ピアノは飲み屋の楽器であるとか、ギターやドラムは悪魔の楽器と言われたこともあります。今はそういう時代ではなくなっていて、大分良い時代になってきたと思います。テクノロジーが発達して、電子楽器に関しては、日本の小さな教会でも割りと手軽に手に入れて、それを用いて良いサウンドを作り出すことができます。教会にとってチャンスな時代だと思っています。

訳詩の課題ですが、J-Worship シリーズ (いのちのことば社) の CD 作成時に、翻訳で 60 曲ほど携わったのですが、全部権利ビジネスなので自由に翻訳はできませんでした。英語を日本語にした場合、内容は 3 分の 1 くらいになります。英語は一つの音に一つの単語がつきますが、日本語はそうはいきません。その内容を、一度アメリカのレコード会社に送ります。それで許可／不許可となるわけですが、不許可の場合は、クリスチャン用語のオンパレードになってしまいます。それは、どんなジャンルの音楽であっても、違和感を覚える曲になってしまう。それで、ある時から翻訳という仕事は止めました。もうひとつ止めた理由は、さびに入る前に英語のことばがやたら多い曲があります。そうすると日本語に翻訳するのは不可能になってきています。

ですから、今のムーブメントとしては、日本人が日本語でしっかりと歌詞を作って、ポップス系や、歌謡系のワーシップソングを作ろうということだと思います。

宇内：先ほどの倉沢先生のご発言を伺って思ったのですが、音楽で分裂するということ考えた時に、実は、それは表層的なもので、その元になる人間関係とか信頼関係がないというのが一番大きな問題ではないかと思っています。普段は、メタルやハードロックは聞きませんが、大好きな俳優がメタルやロック音楽を使った舞台をしまして、行ってきました。その時に、こういう世界があるのか、なるほど、これは面白いかもしれないと実は思いました。私の音楽の嗜好からいえば行かなかったと思いますが、単に俳優さんに惹かれて行きました。もしかしたら、教会でもそういうことがあるのかなと思うと、実は、音楽以前に人間関係だったり、新しいムーブメントがパーンと来た時に、そちらに乗ってしまう牧師先生たちも割りといらっしやるように思います。それは、人を集めるには確かにいいかもしれませんが、そこの中には、ひっそり

と讃美歌を歌うことが好き、という少数の人たちもいるかもしれない、その人たちへの配慮を、牧会者の方々に持っていただきたいと思います。色々なことを加えるのは大賛成なのですが、それも急ピッチではなくて、丁寧に扱っていただきたい。大竹先生は、讃美歌から新聖歌にするのに2年かけたとおっしゃっていました。それは、人間に対しての丁寧なアプローチであったという気がしています。だとするならば、音楽にもそのようなアプローチがあってしかるべきかな、と思います。

佐佐木：永井信義牧師（東北中央教会）が、テキサスの教会で音楽主事をしているときに、いわゆる讃美歌、聖歌を使う礼拝の教会だったのですが、そこにバンドを入れて、ワーシップソングに移行していく時に、7年かかったと言っていました。

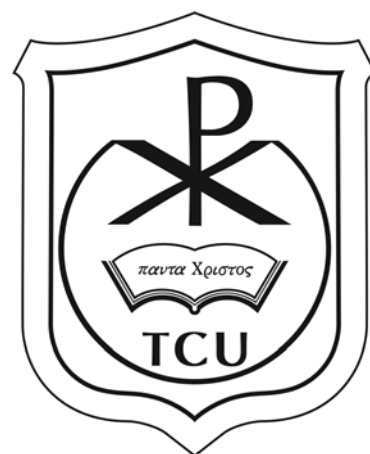
それから、先ほどの人間関係についてですが、日本の場合、ワーシップリーダーがわりとスター扱いされると、自分に栄光を帰しているというパッシングを受けますが、世界にはワーシップリーダーの大スターがいます。私は日本ゴスペル協会の役員をしていますので、そういう人たちとアメリカに行って、お会いすることがあったのですが、1時間2時間話していても、ぼろがはがれません。なぜ、こんなに大スターなのに謙遜になつていられるのだろうと思うくらい、ひとりの信仰者、ひとりの献身者として、どこから見てもきっちりとしている、そういう人たちです。だからこそ、彼らはスターとして皆から信頼されて、彼らのワーシップリードに導かれて、皆が安心して賛美をささげられるのだと思います。ただ単に、スターになって、高慢になって、スキャンダルを起こして駄目になる、というようないわゆる日本のスターではなくて、そういう人たちが必要なのではないかと思っています。同じように、あの人は教会のオルガニストで、素晴らしい演奏者ですよ、と言われるような人たちがたくさん起こってきて、

皆があこがれて、そのような人たちが行っている教会に行って、本当の演奏を聞いてみようと思うのではないかと思います。

すべての教会に適用はできないと思いますが、伝道が成功している教会というのは、アメリカ、オーストラリア、韓国もそうですが、18歳から25歳くらいの年齢にターゲットをしばって伝道しているところが多いです。どういうことかと言うと、その年齢層の人たちの音楽的な趣向を調べ、礼拝のスタイルをそこに変化させていく。25歳を過ぎた人たちは、サポートにまわっていきます。そうすることによってジェネレーションが途切れることなく、教会を成長させるという方法があるそうですので、ぜひ、参考にしていただければと思います。

司会：ありがとうございました。

2013 年度 東京基督教大学 教員研修会



2013 年 8 月 28 日 (水) 9:30-15:00

国際宣教センター

プログラム

9 : 3 0 - 開会礼拝 大和先生
9 : 4 0 - 「神学部学生の主体的学びについて」
岡村先生

..... 休憩

1 0 : 4 5 - ワーキンググループ
グループ毎にリーダーと書記（全体まとめて発表）をたてる
1 1 : 4 0 - 全体まとめ（チャペル）

..... 昼食・休憩

1 3 : 0 0 - 教育 PDCA サイクル説明 小林先生
1 3 : 1 5 - 学科・専攻タイム
神学科（セミナー室 2） 山口先生、ショート先生
福祉専攻（セミナー室 3） 稲垣先生
国キ専攻（セミナー室 1） 西岡先生

1 5 : 0 0 終了

参加対象：専任教員、非常勤教員、教学関係職員

教員研修会説教

大和 昌平

「あなたは何と云うのか？」

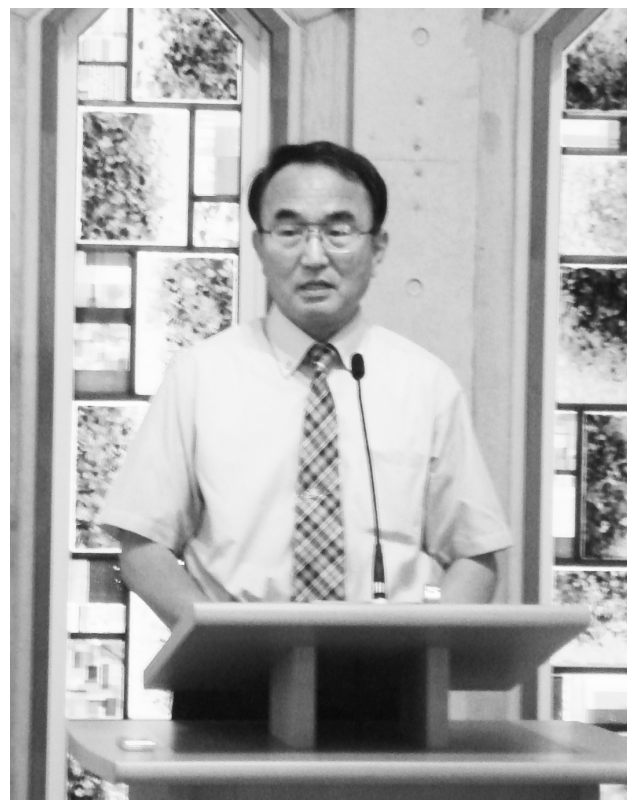
マタイ 16：13～18

何年か前にこの同じ仕事を与えられた時、半藤一利『昭和史』を取り上げたのですが、今回も半藤一利さんのことに触れたいと思います。半藤さんが書かれた『日本型リーダーはなぜ失敗するのか』で、太平洋戦争中のリーダーシップについて書いてある本を読みました。問題を三点に絞っていきまして、明快です。現場を知らない、決断ができない、責任を取らない、とまとめています。現場の実情を知らない、すべき判断ができない、部下が失敗したら自分で責任を取らず、部下に責任に押しつける。日本のリーダーがなぜ失敗してきたのかを、この三つで論じています。

今、テレビではやりの半沢直樹も同じで、上司批判だと思います。今、話題になっていますメガバンクのリーダーたちが現場を知らず、決断せず、責任は全部部下に押し付けるということを、倍返しだ、と言っていますけれども、上司批判だと思っ
てみています。半藤さんが取り上げる軍人に牟田口廉也というインパール作戦を発案し、大失敗した人がいます。東条英機の威を借りて、無謀なインパール作戦を実行し、名をあげたいと。これで劣勢となった戦争を挽回させ、東条内閣人気を回復させようとしてしました。でも、現場の師団長は全員が反対する無謀な作戦であったわけですが、「最後までやってみないとわからんだろう」と東条の一言で作戦は実行されたようです。結果としては、餓死した日本兵の死体がインパール街道に山をなし、負傷兵の上をイギリス軍戦車が驀進する有様。そういう歴史の教訓があります。

牟田口さんは師団長が無能だったからだと責任を部下に押しつけ、戦後も戦犯容疑になりながらも釈放され、戦後長く生きています。半藤さんは歴史家ですので、こういう人と何度も会ってインタビューをしています。牟田口さんは「なんでオレがこんなに悪者にされなければならんのだ」といつも激高したということです。牟田口は東条英機の威を借りて、権限だけ振り回し、大失敗しても責任を取ることなく、最後まで自分の失敗を省みることをしなかったそうです。半藤さんは83歳で背筋を伸ばして話すわけですが、歴史の失敗という重い事実を、冷静に語っている姿が渋いなと思ってですね、そういうことをこの夏考えさせられました。今読みましたところをリーダー論として、少し読んでみたいと思ったわけです。

ここは、ペテロが初めてイエスを神の子だと告白する、福音書の分水嶺となる箇所です。少し無理があると思いますが、この時に主イエスの弟子への態度にリーダーを育てる姿を見ました。イエスは、「人々は私のことを何と云っている」と聞かれるわけですね。現場はどうなんだと問いかけ



ている。そう読むことに少し無理があると自覚していますが、預言者だなどと言っていると答える弟子たちに、あなた方は私を誰だと言うのか、とイエスは詰め寄っています。あなたは私を何だと考えるのか？これは明らかに自分で判断させようとしています。あなたはこの現実の中で、何と判断するのか、どう決断するのか、とイエスは問うています。キリストですと答えたペテロには、あなたのその告白の上に教会を建てようと宣言されました。イエスは決断をしたペテロに、教会建設の大きな責任を与えておられます。現実の中で、人々が何と言おうと、あなたはどう判断するのか。こういうふうに部下たちに言わせて、決断をさせて、決断をしたペテロに対して責任を与えるというのが、イエス様の弟子教育であったのではないかなということをおぼされました。ペテロを立てたのは私の責任です、とイエス様は言われると思います。人まかせにせず、部下に丸投げせず、自分で現実の状況判断をさせ、やらなければならない決断をして、やったことは、失敗をしたとしても、私が責任を持ちます。それがリーダーであり、この箇所を、そのようなリーダー論として、この福音書を読み直していました。

私は夏の仕事としては、もう少しで仕上がる論文に時間をかけました。今、取り組んでいるテーマは、キリシタン時代初期の仏教徒の好尚についてですが、高橋さんが紹介してくださったネットの論文紹介に、読んでいなかった論文がいくつも出てきまして、それを読んで、肝を冷やす夏でした。

大学からは長老教会の修養会に押しかけ分科会を井上先生とさせていただき、350名の前で、10分間、TCUの案内をしてきました。卒業生の川北栄子さんをお願いして、中高生の集まりでも宣伝をさせていただきました。何人もの先生方が井上先生と私に名刺をもって挨拶に来られました。私は久しぶりに長老教会の今の雰囲気と言いますか、教会の現場の空気に触れた思いがしまし

た。それは、若い中高生たちから、先生方、またかつて自分が神学生時代にお世話になりました長老さんたちに会いまして、現場の雰囲気に触れた思いでした。

また、オープンキャンパスで模擬授業と面接に加わりましたが、付き添いを含めて30名くらいの方が来られました。前で話していると、たくさん来てくれた参加者たちの期待するような、試すような目、付き添いの親御さんの厳しい見方、そういうものに触れました。現場でTCUはどう見られているのか、どんな期待をされているのか、どんな批判を受けているのか？自分で触れていないとだめだと思わされたしだいです。

半藤一利さんはリーダーになる人間は、現場を自分で知っている、自ら状況分析して決断をする、その決断の結果、うまくいったとしても、うまくいかなかったとしても、その責任は自分が取る。なぜなら、リーダーとは決断をして、責任を取るためにいるのだからと語っていました。イエス様が弟子たちに決断させて責任を取られたことを思われます。私たちも主イエスの弟子として、この大学でイエスから求められていることに取り組んでいきたい。人々はTCUをどう見ているのですか？あなた自身は、TCUは何であると考えているのか？そこでのあなたの責任は何なのか？そんなふうにイエス様から問われたように思います。今日の研修から秋学期をスタートできることを感謝しています。

神学教育と Active Learning
- 実践的取り組み -

岡村直樹
2013/8/25
(東京基督教大学教員研修会)

Dr. Mary Elizabeth Moore

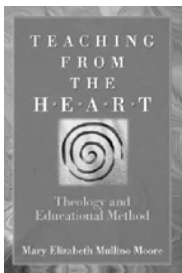
Dean of Boston University School of Theology

「閉ざされた教育は、乾いて無機質で、過去に集められた情報を機械的に復唱するものである。閉ざされた教育者は、学生を矯正の対象としてのみ……又は教師の持つ知識の置き場としてのみ扱おうとする。

開かれた教育者は一方で、個性豊かな人々を対象にした教育プロセスで起こる様々な問題の中に新しい可能性を見だし、古い枠組みを新たにし、ステレオタイプを廃する働きをするのである。」

M.E.Moore, Teaching from the Heart

この「閉ざされた教育」は時に、Content Focused Education や Educational Banking Method と呼ばれ、その保守的なありようが、20世紀中頃から今日まで、約半世紀にわたって批判の対象となってきた。



モア-の宗教教育論で一貫しているのは、「教師が生徒に知識を与える」というトップダウン型の、いわゆる伝統的・保守的（モア-曰く封建的）な教育方法に対して非常に厳しい見方をするという点と、プロセス神学の世界観、特に「世界の有機的な繋がり」を宗教教育論の礎に据え、神学的世界観と教育論が常に補い合う関係性にあるべきであるとするとする点である。

（プロセス神学は、ホワイトヘッドの哲学に由来する神学運動である。プロセス神学は、神と世界の間を「有機的な繋がり」と説明するが、モア-は自らの目指すものを「有機的な神学」また「有機的な教育」としている。）



Alfred North Whitehead
(1861 - 1947)

教師と生徒の双方を有機体の一部として見るとき、教師と生徒は互いから学び合う存在として位置付けられなければならない。

「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」ピリピ2：3

また神と世界が有機体として繋がっていると意識するとき、宗教の学びは、その内容を聖典等に限定されるべきではなく、更に広く世界に目を向けることが促されるべきである。

「神学は一般の文化、学問と関係をもつべきである。・・・神学は、科学や哲学、また歴史学との関連性を考え、・・・また聖書以外の洞察も参考とすべきである。」エラード・エリクソン『キリスト教神学』（いのちのことば社）



また最も注目されるべき点は、モアーの教育論（ペダゴジー）が、信念を持つ神学的世界観とそこから沸き上がる情熱に裏打ちされている点ではないだろうか。



それは、教育のコンテンツ（内容）に対して教師が持つ情熱と、同等の情熱が、教育方法論（ペダゴジー）に向けられているかという問いでもある。

伝統的な宗教教育者の多くは、教育コンテンツの確実さが、教育の成功に直結すると考えてしまう。それは、神学や世界観は、教えるべき内容であり、教育論や方法論に深く関わるものではないとする考え方に繋がる。

“...to begin a dialogue between educational method and theology (that) might transform both.” . . . Moore



しかしモアーは、「神学と教育論の対話を始めることで、双方は刷新される。」と主張する。

例えば、「学校の信仰告白が、教育のコンテンツだけではなく、教育論・方法論に活かされているか。」

「教育方法に教員自らの神学的世界観を見ることが出来るか。」といった問いかけの必要性である。

既存（受け身型・トップダウン型）の教育の流れの一例

教育主題：キリストの愛



教育目標：キリストの愛を知り、体現できる者となる



教育方法：キリストの愛を説教（レクチャー）する



福音主義・聖書信仰の伝統に立つ教育従事者の多くは、言語靈感の重要性を強調するがあまり、教育コンテンツの確実さが、教育の成功に直結すると考えてしまう。しかしイエス・キリストご自身や、聖書の多くの登場人物は、実に様々な方法を用いてメッセージを伝達し、また信者の信仰を成長させるための様々な手立てを用いている。



聖書に登場するペダゴジーのバラエティー

視聴覚教材、シンボリズム、擬人的表現、たとえば、

実践的訓練、コミュニティー参画、etc.

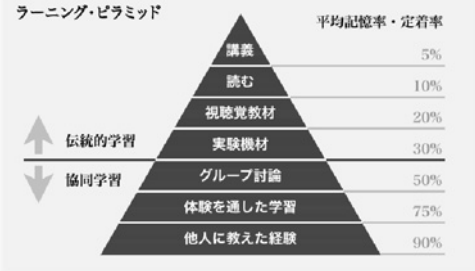
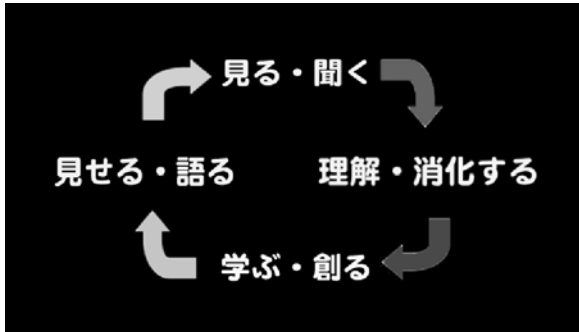


「これらの石はあなたがたにとってどういうものなのですか。」

ヨシユア記 4章 6節



聖書のペダゴジーには、単なる継続性を越えた、
循環（ループ）的特質が内在する。



National Training Laboratories (USA) の調べによると、授業から得た内容を覚えているかを半年後に調べたところ、定着率の高い学習方法を定着率の高い順に並べると、「他の人に教える」、「自ら体験する」、「グループ討論」の順になった。一方、最も学習定着率の低い学習方法は、「ただ黙って講義を聴く」という結果であった。能動的に授業に参加し、行動を伴いながら学ぶことが学習定着率につながるのである。

キリスト教教育論集

第 21 号
2013 年 3 月
目次

45 頁 - 48 頁

49 頁 - 52 頁

53 頁 - 56 頁

57 頁 - 60 頁

61 頁 - 64 頁

65 頁 - 68 頁

69 頁 - 72 頁

73 頁 - 76 頁

77 頁 - 80 頁

81 頁 - 84 頁

85 頁 - 88 頁

89 頁 - 92 頁

93 頁 - 96 頁

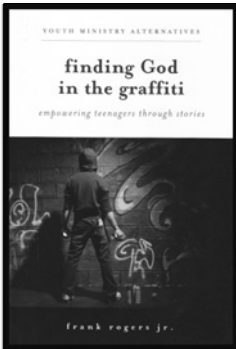
97 頁 - 100 頁

「ユースの宗教性・倫理性の発達につながるナラティブ・メソッドとその実践」
岡村直樹

<要旨>

ハンス・フライやスタンリー・ハワーwsらによって提唱された「物語の神学」に基づき、二十世紀後半以降の現代キリスト教神学の流れの中で確立されたナラティブ・メソッドは、ここ20年ほどの間に強調されることが多くなった。宗教教育における比較的新しいペダゴジーの展開である。それはキリスト教教育を受ける若者の宗教性の発達、具体的には宗教心の喚起、信仰心の成長、倫理観の醸成、といった多くのポジティブなメリットをもたらす方法であることが指摘されている。

宗教教育学、特に信仰形成とナラティブ・メソッドの分野、およびキリスト教ユースミニストリーの専門家であるフランク・ロジャースは、このメソッドがキリスト教界において効果的に用いられていない現状を憂慮する。



Frank Rogers Jr.

Finding God in the Graffiti
The Pilgrim Press c2011

<要旨・・・続き>

具体的な問題点としては、ナラティブの美的側面に対する配慮の欠如、ユースがナラティブに接した後の再考や回想の機会の不足、さらにはユースの自主的なナラティブの語り直しや、ナラティブ創作の機会の不十分さ等が挙げられている。

教育者はどのようなナラティブを選択し、それをどのようにプレゼンテーションするべきか。ナラティブを聴くという「受け身」だけでは終わらない、ナラティブとの「能動的」なインターアクションとはどのようなものか。ナラティブを「生きる」とはどういうことか。ロジャースはこのような問いかけを通しつつ、ユースの宗教性・倫理性の発達という観点から、トップダウン型の伝統的宗教教育方法に行き詰まりを感じる多くの教育者に対し、希望の持てる新たなペダゴジーを提供する。

教育コンテンツと表現方法に関して

- (1) ユースがどのようなナラティブに対して興味を持ち、引き込まれるかという考察の不足
- (2) ナラティブの美的側面 (narrative aesthetic) に対する配慮の不足



アクティブ・ラーニングに関して

- (3) ユースがナラティブに接した後の再考や回想 (reflection) の機会の不足
- (4) ユースの自主的なナラティブの語り直し (retelling) や、ナラティブ創作の機会の不足
- (5) ユースがそれぞれの生活環境の中でナラティブを「生きる」ことに対する励ましの不足

「キリスト教世界観」クラスにおける新しい取り組み

「キリスト教世界観は、私たちがキリスト者として、どのような視点で日常生活に望むべきかを考える枠組みです。TCUでの生活のみならず、今後生涯をキリスト者として歩むうえで、キリスト教世界観は重要な意味を持ちます。授業を通して、まずはキリスト教世界観の入口に立ち、すべてのことを通してキリスト者として生きる生き方を共に考えていきましょう。」
・・・岩田三枝子先生

2013年度春学期・新入生対象αクラス (25名・4回)

- 「ボンヘッファーの生涯を通して学ぶキリスト教世界観」
- (1) 再考や回想 (reflection) の機会を提供する。
 - (2) 語り直し (retelling) や、創作の機会を提供する。
 - (3) 後進へ (クリスチャン・ユースへ) メッセージを伝える機会を提供する。

<授業計画>

ボンヘッファーの生涯に関するレクチャーを聞く (映像付き)
↓
個人及びグループ・リフレクションと発表の時を持つ
↓
グループ別に、ボンヘッファーの生涯をスキットで表現する
↓
個人及びグループ・リフレクションと発表の時を持つ
↓
グループ別に、ボンヘッファーに関するティーチングを行う
↓
個人及びグループ・リフレクションと発表の時を持つ

リフレクションを促す質問の例

- 1) ボンヘッファーはどんな人物だったと思いますか。
- 2) あなたはボンヘッファーをどう評価しますか。
- 3) スキットを通して、ボンヘッファーに関して、どんなことを学びましたか。
- 4) スキットを通してボンヘッファーに関すること以外に、どんなことを学びましたか。
- 5) あなたの信仰心 (宗教心) や世界観、ものごとの考え方に変化が起きましたか。具体的に書いて下さい。
- 6) ボンヘッファーについて教えることを通して、何を感じ、何を学びましたか？
- 7) 4回の授業の経過：講義→スキット→グループワーク→ティーチング、を通して、感じたこと、気がついたこと、変化したこと、反省したことは、どんなことでしたか。

リフレクションから浮かび上がってきたこと

1) ボンヘッファーに関して

レクチャー直後は、ボンヘッファーがヒトラー暗殺計画に関わったことに関する倫理的是非が、学生によるリアクションの中心を占めていたが、スキット後は、彼が暗殺計画に関わる中で死に至るまでの信仰の葛藤が、ディスカッションの中心となった。

- 「第一印象がすべてではないと思った。」
「ボンヘッファーの悩みや葛藤を感じた。」
「違った視点から彼を見ることが出来るようになった。」
「彼は逃げずに向き合ったと思う。」
「彼には彼なりの正義があったと思う。」
「背景や経緯を知ることで、彼をもっと良く理解できるようになったと思う。」

リフレクションから浮かび上がってきたこと

2) 他者の表現や意見、信仰に関して

スキット作成のために、クラス時間外にグループで集まり、シナリオや配役、表現方法等を考えるプロセスで、他者の持つ様々な意見や表現方法を知り、その事から学んだことが多く浮上した。

- 「色々な表現方法があっっておもしろかった。」
「みんなの考えが同じではないことがおもしろかった。」
「みんなの想像力がすごいと思った。」
「みんなボンヘッファーから情熱を学んだと思う。」
「選曲やダンスのセンスがすばらしいと思った。」
「色々な解釈を見て鳥肌が立った。」
「物事に対する見方には、人の数だけ違いがあるのだなあと思った。」

リフレクションから浮かび上がってきたこと

3) 自身の表現や意見、信仰に関して

スキット作成のために、クラス時間外にグループで集まり、シナリオや配役、表現方法等を考えるプロセスで、自身の思考や信仰、また自身の表現方法の再考が促されたようであった。

「正義ってなんだろうと考えさせられた。」
「もっと踏み込んで考えなくてはならないと思った。」
「本質に関する事以外は柔軟であっていいと感じた。」
「もっと幅広い視野を持ちたいと思った。」
「物事を断片的にはなく全体を知る事が大切と思った。」
「苦悩して神と向き合わなければならないと感じた。」
「体を使って神と向き合うことの大切さを思った。」
「現代にあてはめて考えることが必要だと思った。」

リフレクションから浮かび上がってきたこと

4) コミュニケーションの心構えや、スキルに関して

ティーチング準備のため、想定された相手に対して、どのように、何を伝えるべきかについて悩み、グループ内で試行錯誤する中からも様々な事が浮かび上がってきた。

「時間内に終わらせることの難しさを感じた。」
「相手に解りやすいように伝えることの難しさを学んだ。」
「本番は練習のように行かなかった。」
「表現の仕方はむづかしいと思った。」
「教える事は楽しい。」
「自分たちが内容を十分に理解しないと教えられない。」
「真剣さや、問いかける姿勢が大切だと思った。」
「目的を明快にすることが大切。」

リフレクションから浮かび上がってきたこと

5) 他者理解に関して

ティーチング準備のプロセスの中で、想定された相手をまず知り、理解することの必要性が、浮かび上がってきた。

「上からものを言わず、相手の目線に立つことが重要。」
「ユースの関心事を、もっと知らなくてはならない。」
「ユースの今の状況において、どれだけ印象を残せるのか難しい。」
「笑いという要素を用いることは、ユースにとって効果的だ。」
「対象をよく理解することが大切。」
「対象者をもっと絞り込まなくてはならないと思った。」
「対象者がだれなのかをもっと考えないといけない。」



宗教教育に用いるアクティブ・ラーニングの可能性


- ・新しい視点が提供されることにより、より深い、多角的な考察が促されるようになること。
- ・自身の価値観を自身の中で理論的に再考する作業が促されること。
- ・自主性を養い、宗教性・倫理性の成長を促すこと。
- ・信仰の多様性を認めるようになること。
- ・それぞれの想像性を認め合うことによって、互いを受け入れあうことが出来るようになること。
- ・受け入れられる喜びを体験できること。
- ・楽しさや達成感が教育的効果を増大させ、またコンテンツの定着化を促すこと。
- ・個々の、またグループの宗教アイデンティティーの形成を促すこと。
- ・コミュニケーションスキルを養うこと。

アクティブ・ラーニングの課題

- ・ 学びをコントロールする上で困難さがあること
 - 1) ナラティブ（コンテンツ）の選択肢
 - 2) 課題のバラエティー
 - 3) リフレクションのための質問の工夫
- ・ 受け入れる側（学生）の準備が必要であること
- ・ 継続した取り組みの必要性があること
- ・ 教育コンテンツの重要性が再認識されるべきこと
- ・ 教育者の意識変革の必要性があること
- ・ 指導者養成の必要性があること


TCUでのアクティブ・ラーニングの具体例

- ・ グループ発表
 - 研究、スキット、映像、音楽プレゼンテーション
 - 相互評価、（新ミニストーリーの役員会プレゼン）
- ・ 授業の前設
 - 前回の授業のまとめや・疑問・質問を発表する
- ・ ディスカッション・リーダー（ゼミ・リーダー）
 - 課題箇所をまとめ、ディスカッションの質問を用意
 - ディスカッションをリードする
 - ゼミの日程、場所、内容を決め、皆に連絡する
- ・ 授業のボランティア・アシスタント
 - 小グループのまとめ役、相談にのる係
- ・ ネットによる課題閲覧と相互評価
- ・ インターンシップとクラスのリンク付け



第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書

アクティブ・ラーニング型授業はハードルが高い？



神戸大学・川嶋津夫教授
アクティブ・ラーニング型授業の取り組み
調査期間・2012/11

	よくあった	あまりなかった	ほとんどなかった
学期末以外にもレポートが課される授業	34.4	48.4	12.7 4.4
学期末以外にもテストが課される授業	29.2	50.6	14.9 5.4
毎回、授業内容に関するコメントや意見を書く授業	31.5	42.5	18.0 8.0
コンピュータやインターネットを活用する授業	21.8	46.7	23.2 8.3
少人数のゼミ・演習形式の授業	21.9	42.8	19.9 15.4
グループワークなどの協同作業をずる授業	15.7	43.4	28.0 12.9
プレゼンテーションの機会を取り入れた授業	14.2	43.4	28.1 14.3
ディスカッションの機会を取り入れた授業	13.0	41.2	30.0 15.8
学んでいる内容と将来のかかわりについて考えられる授業	14.2	39.2	31.1 15.5

教員と学生が授業時間内にコミュニケーション（議論・質問・対話など）がとれる授業	11.2	39.3	33.5	15.9
実験や調査の機会を取り入れた授業	16.8	32.8	25.8	24.6
学生の意見や授業評価の結果を反映させた授業	9.3	38.8	34.9	17.0
提出物に教員からのコメントが付されて返却される授業	10.0	33.7	32.5	23.8
教室外で体験的な活動や実習を行う授業	10.8	28.3	29.1	31.8
インターネットやメールなどを利用して、授業以外にも教員や学生とコミュニケーション（議論・質問・対話など）がとれる授業	8.2	30.0	32.2	29.6
大学での学習方法を学ぶ授業	5.8	29.1	31.3	33.8
高校で勉強する教科の補習授業	5.8	28.7	28.0	37.5
語学以外の授業で、外国語で行われる授業	7.6	21.8	24.9	45.7
上級生や下級生と授業時間内にコミュニケーション（議論・質問・対話など）がとれる授業	4.8	21.1	32.9	41.2

グループ・ディスカッション・トピック



- 1) 私の分野での授業に、アクティブ・ラーニングを取り入れることは可能か？それは必要か？問題点は何か？
- 2) もし可能であれば、どのような形で、何を目標にして実施されるべきか？具体的な提案があるか？



岡村直樹先生



岡村先生からのクエスチョンを受けてグループ毎にディスカッションし、全体でのまとめを行いました。



ワークショップ

10月22日 教授会

教授会における学習ポートフォリオ(以下 PF)の紹介

2013年10月22日 教授会における学習ポートフォリオ(以下 PF)の紹介

発表者：森恵子

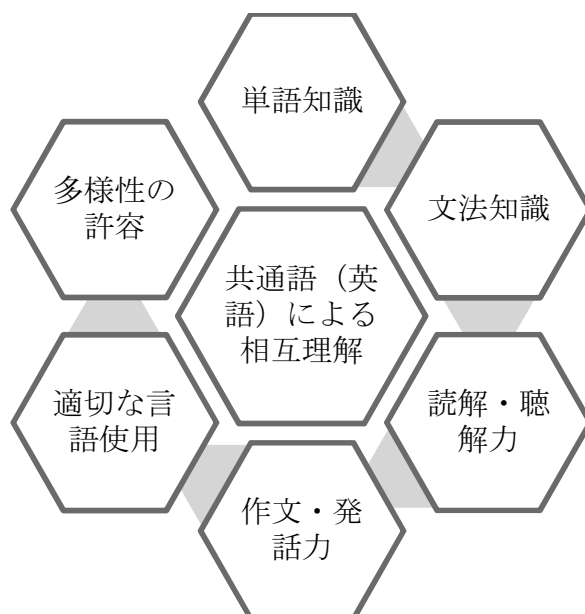
時間：15:40-15:55 (質疑応答含め)

目標：発表者のクラスで実施している学習ポートフォリオのシステムと効用を示す。

＜はじめに＞PFとは何か、という問いの答えとして、学生にとっては、自分の学びのプロセスを観察・評価する道具。教員にとっては、学生が実感する教育効果を見る道具。背景にあるのは、簡単に言えば「学習者が主役」という考え方。

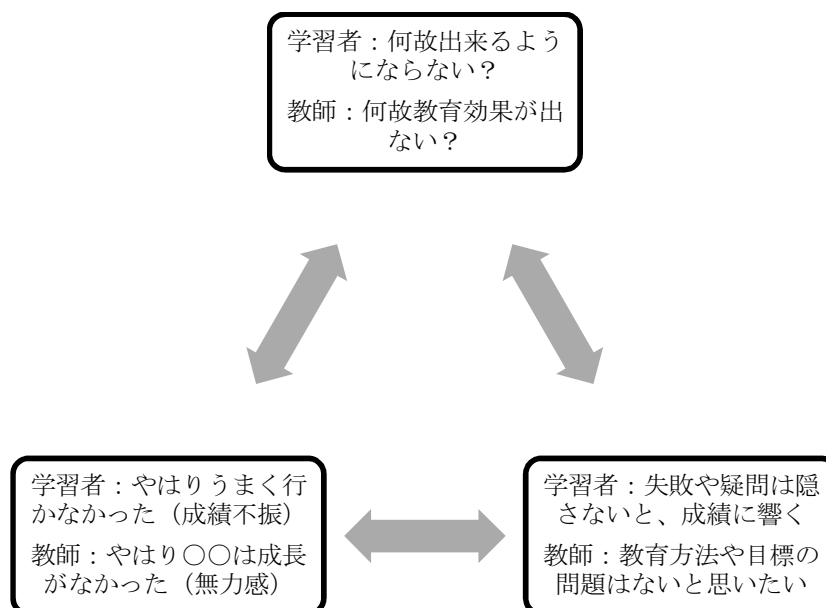
PFを活用する学びのあり方は、アクティブラーニングの考え方と重なる部分も多い。以前FDで学んだケン・ベインの「ベスト・プロフェッサー」から言葉を借りれば、「教師の役割は、学生の学びを養い育てることだ」また「知識は受け取るものではなく、学生自ら構築するものだ」という思想に立っている。よって、教師は目の前の学生がどれだけ豊かに学べるかに主眼を置き、どれだけ多くを伝えたか、は優先度が下がることになる。言い換えれば、「みんな違って、みんないい」。学びの量と質が個人により異なることを、肯定的に捉えた方法論と言える。

PFは様々な用途で実行可能だが、今回は森の担当する英語科目で6年ほど実施している、科目レベルのPFを事例として紹介する。



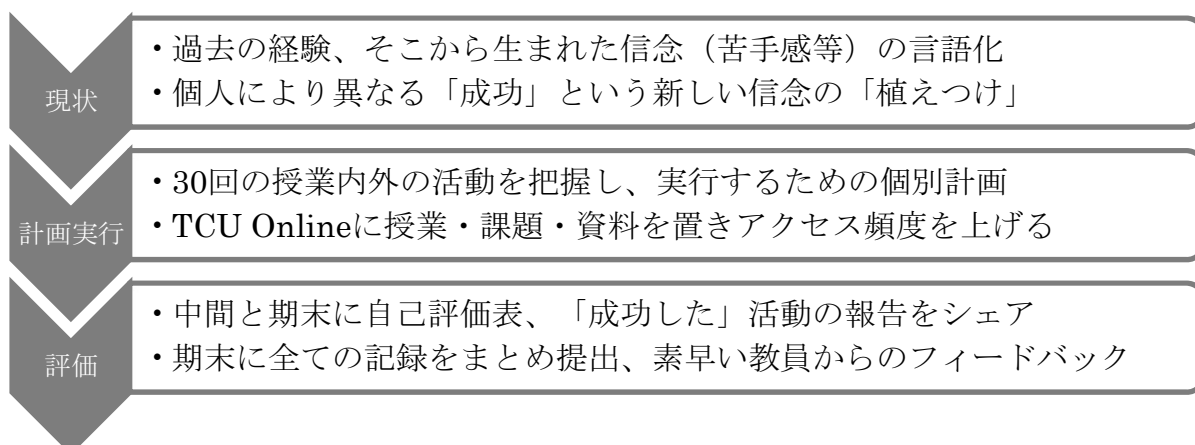
＜一般英語教育の守備範囲＞上記の基礎的な力を全て伸ばした、よりよいコミュニケーションの力が「総合力」と言える。TCUでは開学当初から、この全てのスキルがバランスよく成長した状態を理想として、カリキュラムを組んできた。しかし発表者は(知識と経験不足も相まって)、クラス全員に効果的で、バランスよく学生の力が伸びる、というアプローチを見つけることはできなかった。

<PF 開始の動機づけ> 下記は発表者のクラスで陥った悪循環をそのまま表した図だが、これを打開したいというのが、PF を始める強い動機づけになったと言ってよい。



TCU には毎年、英語嫌いの学生が入学する。その多くは、既にこの悪循環を経験している。夢（例：英語ペラペラ）と現実（例：成長を実感したことがない）の乖離が大きい。故に、目標に向かって学び始めても、思い通りにならないと「やっぱり無理だ」と諦めてしまう。この繰り返しによる無力感の打開策を考える中で、ポートフォリオ導入が始まった。

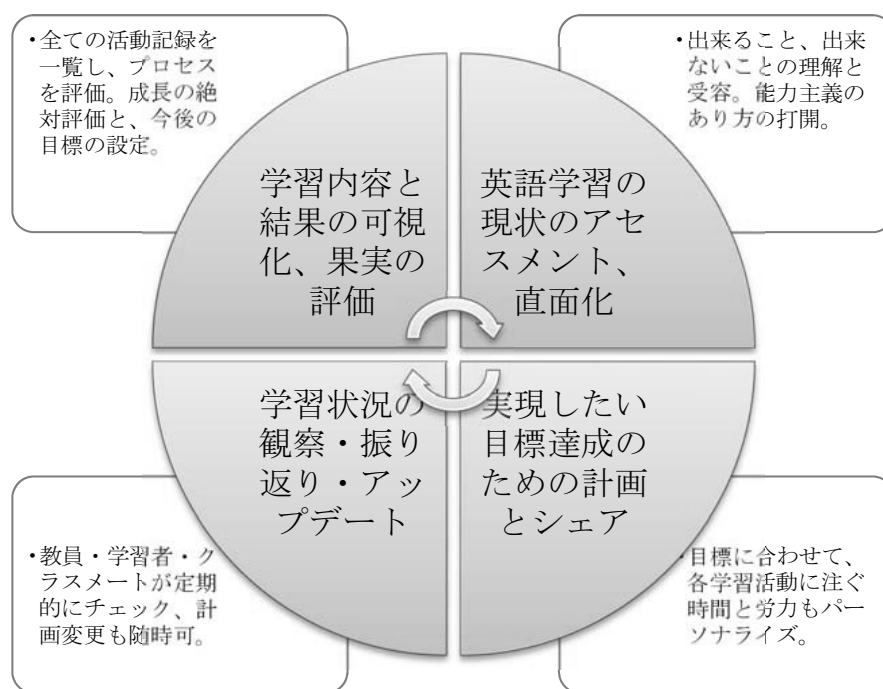
<PF 導入> 導入時に確認したことは、当該クラスにいる英語学習者は、英語力のバランスが取れていないこと（例：単語力はあるが作文・発話ができない）。また、全ての力を同じレベルに伸ばさなくてもよいこと（例：一番苦手な文法は、中学レベルをマスターする）。学生にはまず、自分の英語力の凸凹を客観視することを勧めた。（特に「英語はとっくの昔に諦めた」と公言する、中学レベルでつまずいたままの学習者への対応が急務になっていた。）



<PFの発展>PFはクラス形式や教科の性質に合わせて、どのようにも構築できるので、小さく始めて発展していける。例えば森の場合、初めは学期末に自己評価表を提出するだけだった。初期（2008-10年度）の3年間に、学習計画（学期初め）と活動の振り返り（学期末）のため、少しずつワークシートを作っていた。その途上で、成績評価基準の一部にPFが加わった。

次の2年間（2011-12年度）には、成績評価基準は「能力の反映」ではなく、むしろ活動を積み上げるポイント制であることを、より明確にした。学期の初めから終わりまでの流れを観察・記録させながら、自分のベストを尽くし、自分のペースで成長し、それが成績にも反映される、という方針を浸透させた。

学生には、クラス内外の活動・課題を全て行えば、A+の成績を得られることを確約した。



今年度からは、図でいうと右下部分を増やした、発展形のポートフォリオを実施している。（この右下部分を学期初めに行う。各自、英語を使って何ができるようになりたいか、という big goals を設定し、その達成に役立つ学習計画を作り、それを左下・左上の観察・評価につなげていく。それが、前学期までのアセスメントとの比較、現状認識のアップデートへと続いていく。）教員は、学生がこの4つのプロセスを実行する上でのファシリテーターとして、計画実施を助けたり、個人面談で進捗状況を聞いたり、定期的に行う無記名アンケートから問題点を見つけて対応したりしている。

<PF導入のまとめ>新入生へのPF導入時に明示したことをまとめると、以下の五点になる。1) 学習者のニーズや経験はそれぞれ異なるので、スタート地点が違うこと。2) 一方ゴールもそれぞれ異なるので、各自のゴールに向かう方法やスピードも違ってよいこと。3) PFは、自分がどう学んできたかを俯瞰すると同時に、より自分に合う学び方を知るための記録でもあること。4) 学習記録や自己評価の提出は、正直に書くことに意味があり、美しいウソは現状を正しく把握できなくすること。また、実際より良く見せても成績が上がるわけではないこと。5) 教員はPFを通して、学生個人の関心・考え・経験がどう学びに結びついたかを見ようとしていること。

<考察>今まで受け身の学習しかしてこなかった、と語る多くの学生が、自分のための学びという動機づけを持ち、「英語が楽しくなった」「英語力がついた」と自分を評価するようになった。PFで自分の学習を振り返り、文章化することで、はっきり認識できたのかもしれない。もっと客観的な結果としては、毎学期に一人から数人、テストの点が大きく伸び、習熟度が上のクラスへ移動する学生が増えたことだ。

授業を時々休み、成績が伸び悩む学生にも、PFの意義はあった。例えば入学当初のPFを最後のものと比べると、英語力の部分的な伸びが見えること、活動の達成度も上がったこと、等を個別に伝えて褒めることができる。「英語ができない」ではなく「少しずつだが伸びている」という自己評価は、無力感から有力感へつながる大事なステップだからだ。

PFの形式も、学生の傾向に合わせて変化した。例えば、初めは全て紙ベースだったのが、今は全体のうち半分がTCU Onlineへのアップロードになっている。もともとこの折衷案は、資料の管理が苦手、紙に書くことが苦手、「こつこつ」積み重ねる作業が苦手、という学生たちへの対応から生まれた。代替方法を作ることで、軽度の学習障害がある・メディアリテラシーが低い、など個別の対応が必要な場合、融通しやすいという利点もあった。

<リスク>教師と学生の間に基本的信頼があり、互いを尊敬・尊重できる関係かどうか大切である。

特定の学生が関係作りを拒む場合、クラスメートが足を引っ張り合う場合、「やっている振り」等虚偽の記録や言動がある場合、これまで紹介してきたスタイルのPFシステムは、うまく機能しない可能性が高い。

例えば、学期初めから授業欠席が極端に多く、よってPFシステムの理解もおぼつかない学生には、相変わらず届くことができず、苦戦している。(英語を何度も再履修する学生は、ほぼ必ず出席日数不足の問題がある。)例えばある休みがちの学生には、PFの趣旨を個別に何度か説明したが、結局PFを提出しなかった。理由を問うと「授業でさぼっていたので中身がなく、提出できない」と自己判断し、単位も諦めて落としてしまったというケースだった。

<終わりに>今回は、発表者が担当するクラスで実施中のPFについて、その導入から発展までを簡単に紹介した。PFの実施は、学生が自分の学びをコントロール(計画・実施・修正後再実施・評価)するためのプロセスであり、時間と手間をかける価値がある方法だというのが、発表者の実感である。

第17回 精神ケア学び会

テーマ:若者の食について

3月5日(水) 10:00-11:30

第17回精神ケアの学び会「若者の食について」(報告)

日時 2014年3月5日 10:00~11:40

場所 バルナバホール

出席 18名

1. はじめに【杉谷】

現代の若者の食について

食するためには(動物の)命が犠牲になっている。食べる前のプロセスがあることを真剣に考えて学生に関わっているかを振り返る時間となることを期待する。

2. TCUの食について【辻中】

特徴

- ・ TCUは全寮制で、食堂での喫食も寮教育の一環であり、学校が責任を持っている。食堂スタッフは台風でも大雪でも命がけで食事を用意してくださっていて、これまで食堂が突然給食を中止したことはない。
- ・ 寮教育は規則正しい生活も目指しているの、食事時間は決まってお、寮生がそろって食堂で食事をする。
- ・ 食器の配膳などの当番(朝食のみ)と食後の食器洗いの当番がある。

3. 最近の傾向【辻中】

生活習慣の変化と食事

- ・ 夜型による夜間の食行動と朝食の欠食
- ・ アルバイトによる欠食傾向
- ・ 好きな食べ物を好きなだけ好きな時に食べる

4. 食堂での食行動【鍵谷】?食べるにも飲むにも神の栄光をあらわす、実践神学の食事

「TCU生の食堂における食行動の変化」

1997年春に新任で入った当時は、スタッフと学生の当番の仕事が明確だった。学生が自主的に自覚的に食堂の当番を行っていた印象がある。2001年に献立や食材をキャプテンクックに委託。2007年頃までは当番や食前の祈りも行なわれていた。チャペル終了前に食堂に来る学生もいたが、バツが悪そうにしていた。最近はチャペルの放送がまだ流れているのに、ご飯の釜を開け、人数制限のある料理を先に食べる学生がいる。人ごみが嫌いで遅く来る学生もいる。「早寝、早起き、三度の食事は大切」、今の学生たちにはこの考えも、決まった時間に食べる概念もない。

食事に遅れてきて食器洗い当番をしない学生もいる。「当番」の意味が理解できていない。6~7年前までは各テーブルに10人ずつの料理をまとめて置いて、早く来た人が均等に配膳をしていたが、今は自分の食べるものだけを取り分け、好きなものは他人の分まで取って食べる。

隣の席にある手をつけていない食器を片付けない、テーブルが汚れていても拭かない学生も多い。

新入生は食器洗いができない。先輩からきちんと指導されていない。食事時間も食器洗いの時間も守れない人が多い。当たり前のことができない。

生活リズムを作るのは大学入学以前の問題である。15年前の欠食理由は、祈祷会や教会奉仕だったが、7年前から漠然とした「健康のため」という理由が目立ち始めた。2013年からは理由を選択する様式に変更し、健康に関する場合は診断書を添付することになっている。

Acts1期生(2001年頃)を食堂バイトで雇うことになったが、日本語をよく聞いて、一度教えたことをしっかりやってくれた。Acts1期生の頃は日本人に混じって食事をしていたが、今はActsテーブルが2つある。最近はアルバイトのためかActsテーブルが1つになった。

TCU生には、神学の“プロ”となる前に、常識人として発言・行動してほしい。

5. まとめ

平成17年に食育基本法が制定され、国民運動として食育を指導する時代。

◆(文献1)「大学生の食生活実態と食育の課題」若松法代

「勉強をきなさい」と言われて「食事作りを手伝いなさい」とは言われずに育った子ども達が大学生になった時にどのような食生活を送っているのかという視点から大学生の食生活実態と食育歴を調べ、子ども時代の食育の重要点を明らかにしようと試みた研究。一人暮らしをしている学生の自炊は、①幼少期から日常的に調理の手伝いをしたり、②簡単な料理を自分一人でして家族に褒められたり、③家庭内で父親が調理に関わること等が大学生の自炊実践と関連があることが示されている。

◆(文献2)「大学生の食生活スタイル」(高野裕治)

精神的健康と食行動異常との関係において、何が大学生の食生活にとって適応的に大事なことなのかを示す4つの因子がある。①食事場面の雰囲気、②食事の規律(規則正しい食事、栄養のバランス、家族との食事)、③食事によるストレス回避行動(ストレス発散としての食、楽しみとしての食事、満腹するまで食べる)、④食品の安全性(食品の賞味期限、健康志向食品の関心、食品の安全性)食することは人間の生存の根源であるが、キリスト者はキリストが提供される尽きないパンを与えられている。「過越しの食事」「聖餐」に食することがつながり、共に食することをこの学園で大切にできなければ、神学教育の中核をみおとしていることにならないか。食に関わる大切なことを教職員が食堂スタッフに丸投げして、大切な伝統が失われてないか。説教をするノウハウ・知識だけを教えて、説得力のある行動ができない人を世に送り出していないか。

6. 質疑応答

**2013 年度 東京基督教大学
第 3 回ファカルティーフォーラム**

授業改善～授業相互評価・自己点検評価より～

発表 岡村先生・井上先生

進行 小林先生

学科・専攻会議～卒業前アンケート・面談より～

2014 年 3 月 14 日 (金)

10:00－12:00

大会議室 (本部棟 2 階)

主催 ファカルティーディベロップメント委員会
(担当職員 虫明)

岡村先生

TCU ファカルティーフォーラム

2014年3月14日

1

授業改善とActive Learning - 相互評価から学ぶ -

岡村直樹
2014/3/14
(ファカルティーフォーラム)

2

「相互評価って本当に役に立つの!？」



相互評価の短所と限界

- * 「専門分野が違うので、口出しすべきではないのでは？」
 - * 「1回の授業を見るだけでは、何もわかりません！」
- * 「同僚に対してあまり偉そうなことは言いたくないです。」
 - * 「余計なことを書いて、人間関係を悪くしたくない。」
- * 「質的な評価は主観的であてにならない。」

3



Ken Bein

「同僚の教師による授業観察はティーチング評価のための有効な証拠とはいえないかもしれない。教師たちは、学習とは関係なく、自分と同じ教え方をしている同僚教師に高い点数を、異なるやり方には低い点数を与える傾向があるからである。その上、1つか2つの授業を観察するだけでは、授業の実態を把握することは難しいかもしれないのである。」

(ベストプロフェッサー、178頁)

4

相互評価にありがちな質問



Ken Bein

- 「最新のテクノロジーを使っているか？」
- 「対話を生み出しているか？」
- 「学生を名前で呼んでいるか？」
- 「板書ははっきりとしているか？」
- 「試験答案等は速やかに返却しているか？」
- 「講義を一定(時間)内に押さえているか？」
- 「ディスカッションやケース・スタディを活用しているか？」

これらの質問は優れた実践のポイントであるが、それでもこれらの焦点は、ともすると、学生が何を学ぶか、というよりは、教師が何をするか、という点に焦点が当てられている。そこが問題なのである。(ベストプロフェッサー、173頁)

5

TCU 相互評価の項目

1. シラバスの活用 (わかりやすいか・理解できるか、沿っているか)
2. 担当教員の指導 (声や話し方、教科書・教材は効果的か、教具は有効に使用されているか)
3. 担当教員の態度 (時間の遵守、熱意、準備されているか)
4. 担当教員の対応 (質問に適切に応えているか、時間配分など)
5. 担当教員の前年度の自己評価に基づき改善が見られたか。
6. 良い点を具体的に記述してください。
7. 改善が見込まれる点を具体的に記述してください。

6



Ken Bein

「必要な事は、このような質問を通して、『そのティーチングは、学生たちの思考、行動、および感情において、持続し、実質的で、かつ発展的な違いをもたらし、また、大きな害を与えるようなことがなく学生の学習を援助し励ましているかどうか?』という問いかけをすることである。
(ベストプロフェッサー、173頁)

7



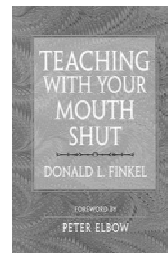
Ken Bein

「誰が評価するかは、学科や学部や大学が決定しなければならない。そして最終的には、その過程はどれだけ評価者が人間の学習を理解しているかにかかっている。すなわち、

- ・人間はどのようにして学習するか?
- ・人間の学習の多様性を理解しているか?
- ・学習のモチベーションをどのように上げているか?

といった事柄に焦点が当てられているかどうかである。
(ベストプロフェッサー、179頁)

8

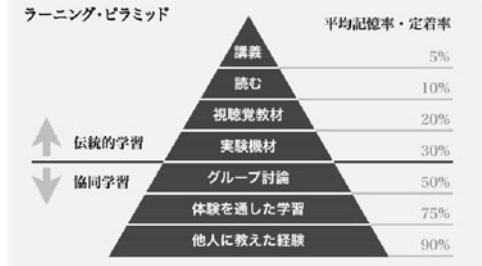


ドン・ヒンケル「話すことなしのティーチング」が主張するように、ティーチングとは、単に講義をするということではなく、学ぶことに手を差し伸べ、励ますための、あらゆる努力を意味している。このことは、ティーチングの概念を根本から転換することを意味するのである。

We may have to learn a lot about "teaching with your mouth shut," as Don Finkel put it in the wonderful title to his book, recognizing that teaching is not just delivering lectures but anything we might do that helps and encourages students to learn. That demands a fundamental conceptual shift in what we mean by teaching.

9

ラーニング・ピラミッド



National Training Laboratories (USA) の調べによると、授業から得た内容を覚えていたかを半年後に調べたところ、定着率の高い学習方法を定着率の高い順に並べると、「他の人に教える」、「自ら体験する」、「グループ討議」の順になった。一方、最も学習定着率の低い学習方法は、「ただ黙って講義を聴く」という結果であった。能動的に授業に参加し、行動を伴いながら学ぶことが学習定着率につながるのである。

10

相互評価を成功させる秘訣は・・・



評価の焦点を教員から学生に移すこと!

Student Focused Evaluation

11



Ken Bein

最良のティーチングは、知的創造と演技芸術の両方の要素を備えていることが少なくない。そのためには、決まり切った仕事（一方向の知識伝達に終始し、紋切り型のテクニックを用いる授業）をする専門家は必要とされない。必要とされるのは、コンテンツを熟知し、様々なティーチング・スタイルを理解した上で、学生の状況に合わせて、臨機応変に最良の方法を用い、学生のモチベーションを高め、彼ら自らが「知の探求者」となる手助けをする教師である。



個性的でインパクトのあるネタ作りと話し方
漫才師のネタ作りでは、個性やインパクトが求められる。さらに笑いをとる要素として、流行や世の中の動きも、うまく取り入れる努力をすることも大事だ。本番では、たくさんの観客の前ではっきりとした口調で話せること、その場の空気を読んで対応できることが求められる。また相方ときちんとコミュニケーションが取れなければ漫才にはならないため、コミュニケーション能力が大切になってくる。
(漫才師養成専門学校ホームページより)

「こうすれば相互評価って役立つかも！」



相互評価の長所と可能性

- * 「自分とは違うスタイル（多様性）を見ることができる。」
- * 「長所を積極的に評価し取り入れることができる。」
- * 「クラスのダイナミクスを観察し、学ぶことができる。」

（学生の表情を見つつ）どのような発言や、教員とのやりとりが、彼らをやる気にさせ、学びに集中させているか、またはそうではないかを観察する。

相互評価・・・まとめ

- * 評価されることからだけではなく、評価することから学ぶ。
- * 相互評価によって授業が改善されるかどうかは、相互評価に臨む教員の姿勢によって大きく左右される。
- * 相互評価のシステム自体が、授業をよりよいものにするのではない。それは授業を改善するきっかけを提供するものである。
- * 授業改善は決められたスキルの習得によって可能になるのではなく、学習の性質の理解や学習者の多様性の理解の上に立ちつつ、様々な変化に臨機応変に対応するという態度によって起こる。・・・ミニストーリー

井上先生

2014年3月14日第3回ファカルティフォーラム
「授業改善～評価会」

授業相互評価を振り返る
I look back on the days when I struggled.

2014年3月14日 東京基督教大学 井上貴詞

2011年～2014年実施してみて良かったこと！

- 様々なスタイル、内容の授業を体験できて刺激を受けた。
- 毎年の授業評価があることが、それに向けてどのように授業のskillを磨くかのモチベーションになった。
- 自分の授業を客観的にみてもらい、ポジティブな評価を受けることは励みと自信に。
- 学科、専攻を越えての教員どうしの交流促進効果がある。

2

授業相互評価の限界と課題

- 一部の授業を見ただけでは、客観的な評価は難しく、評価も遠慮しがち。
- どうしても見栄（虚栄）を張る。
- 個人レベルでなく、メソレベルで解決すべきものもある。



EX. 教室の物理的環境
机の移動の困難さ、ネットがつながりにくさ、Blu-rayプレイヤーの不足

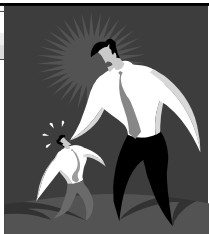
- この評価を自分自身のSDにどう活かすかが鍵か？



3

4年前の自分の姿

- 学生から授業については厳しい指摘が・・・
- 時間が守られていない。
- 内容が難しい。
- 声が大きすぎる。
- 詰め込み過ぎ！
- レポート課題の提示が遅い！
- 演習ばかりは飽きる！



4

どう改善に結びつけたか

- 学生からのリアクションペーパーや質問に真摯に取り組む
- 授業を録画・録音する
- 対外試合に出る。
- → 依頼された講師はできるだけ断らない（地域社会や礼拝奉仕も含め）
- 超一流教員の追っかけ



講師
東京工芸大学芸術学部准教授 大島 武先生
専攻：ビジネス実務論、パフォーマンス研究
日本ビジネス実務学会副会長
全国大学生教養奨励会主催
「カネト・キョウエウ・タマ・オブ・ザ・イヤー最優秀賞」
著書：『相手の弱きたいアと』を話せ！』（マキノ出版）他

5

いろいろ発見！

「授業導入の技法」
香川大学
◦ http://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/introandcollabo_101-124.pdf

6

果たしてその成果は？

“What is the result of the effort?”

“岡村教授にたずねよ！”

7

2013年度第3回ファカルティフォーラム 学科専攻会議（国キ専攻）報告

日 時 2014年3月14日 11-12時

参加者 倉沢正則、西岡力、柳沢美和子、篠原基章、森恵子

1. 卒業前アンケートに基づくインタビューから

- ・ 学生が海外に出た後大きなインパクトを受けることを実感
- ・ 異文化実習から戻って、その経験を神学の学びと結びつける、国キらしい成長の姿が見られた
- ・ 英語のカリキュラム改正に対してはおおむね高評価
- ・ キャリア支援をもっと手厚くする必要性
- ・ 優秀成績賞を取った2名の存在

2. 今後の計画および課題

- ・ 学生・教職員からのフィードバックに基づくカリキュラム改編が進行中
- ・ 異文化実習の拡充に向け検討中（例として、母国に帰った ACTs 卒業生のいる国への派遣の可能性）
- ・ 高学年時にどの神学科目を取るか、学生個人の関心に合わせてアドバイスできるよう、モデルを用意したい
- ・ 国キと ACTs 生の交流を深めるために、留学生による母国のプレゼンテーションを聞く機会を設けたい → いずれはこれが科目として成立すると良いのではないか
- ・ 来年度は国キ教員会議をもっと多く開催したい
- ・ TOEIC の目標点の設定

- ・ ACTs の授業を履修する学生が少ないという課題について：
 - ACTs のクラス及び学生に対する知識のなさが、二の足を踏ませるのでは
→ ACTs 科目履修指導をより細やかにし、履修を励ます
 - 交換留学生は、戻ったら必ず ACTs 科目を取るという条件をつけたらどうか
 - 既に日本語で取った科目を ACTs で取るのはどうか → 同じ科目名では単位が取れない？
 - 3-4 年時の英語クラスを取らなくてよいレベル（TOEIC で判断？）を決め、それに該当する学生が ACTs を取るのはどうか

3. 学生募集について

- ・ 教会・キャンプ訪問、教会への学校紹介訪問、チャーチスクールでの模擬授業の数を増やしていきたい
- ・ 教員が年1-2回はオープンキャンパスに参加し、高校生の興味関心、コミュニケーションのとり方について理解を深めていきたい
- ・ 職員が新生にインタビューし、TCU を選んだ理由を聞き、その情報を共有したい

以上
(文責 森 恵子)

2013年度 第3回ファカルティフォーラム キリスト教福祉学専攻で 話し合われたこと

2014年3月14日

稲垣先生、中澤先生、井上先生、片岡（書記）

○検討事項

① 卒業前学生アンケートの質問項目検討

4択の○×式は 学生の主観なので客観的評価はできない。全体的な比較検討ができない。学生が真剣に答えているとは思えない。信頼性に欠ける。

ほとんどの学生が「はい」「どちらかと言えばはい」と答えているが、卒業共通試験の結果とは矛盾する。

自由記述の欄を書いている学生と空欄の学生がいる。自由記述が書けない学生は論理的に考える力、文章を書く力がついていないとみなされる。

③卒業前判定について

DPに達したかどうかの判定のツールとして

・卒業時全国共通試験の結果 と

・施設実習の評価票の結果 その他チャペルの出席状況はどうか も出された。

*今使用している実習評価は他の学校から持ってきたものなので、DPに添ったものに作りかえる必要はあるか⇒ 実習はキリスト教施設だけではないので一般施設の人にもわかる現状のまままでよいのではないか

② ①を踏まえて各カリキュラムへの反映

卒業研究論文を全員の必修としたほうがよいのではないか。

理論的に考え、文章を書くことを教育の中で訓練していく。そのために

懸賞論文への応募の奨励 — 『公益財団法人 愛恵会』が毎年学生レベルで募集
実習報告集の執筆—実習報告会の実施

○学生募集の課題について

「応募してくる学生なら誰でもよい」ではなく、「思考して実践できる学生が将来リーダーに育つ」といわれるように、可能性のある学生を獲得することがよい循環につながる。

TCU福祉学生がこのような論文懸賞に入選したというような紹介ができればよい。

○その他

在宅ケアが広まる中、教会のケアチャーチとしての役割、その中で介護福祉士の役割、多職種のチームワークが大切になってくる。ぜひそれらを学んでもらいたい。

牧師（将来牧師になる学生も含）の知識・意識が重要になってくるので教会教職の学生にも包括的福祉、終末期ケアなどを学んでもらいたい。

神学科会議ディスカッション ディグリーポリシーに基づく教育評価

2014年3月14日

記録：岡村 直樹

課題

- ・具体的にどのような尺度を用いて評価するか？
- ・個体差が大きいですが、それをどのように評価するか？
- ・卒業前アンケートをどう用いるか？
- ・規準を「共有」することが必要不可欠なのではないか。

意見

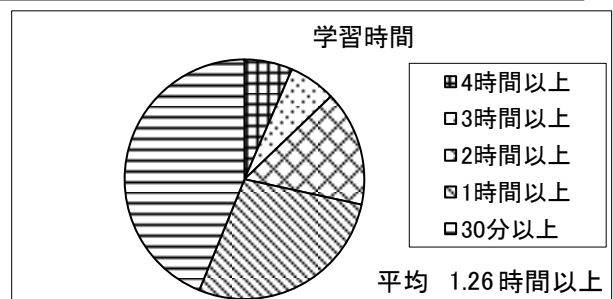
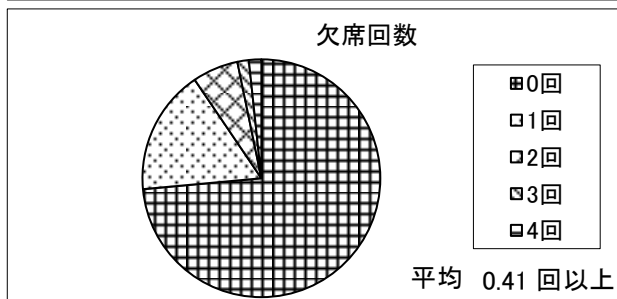
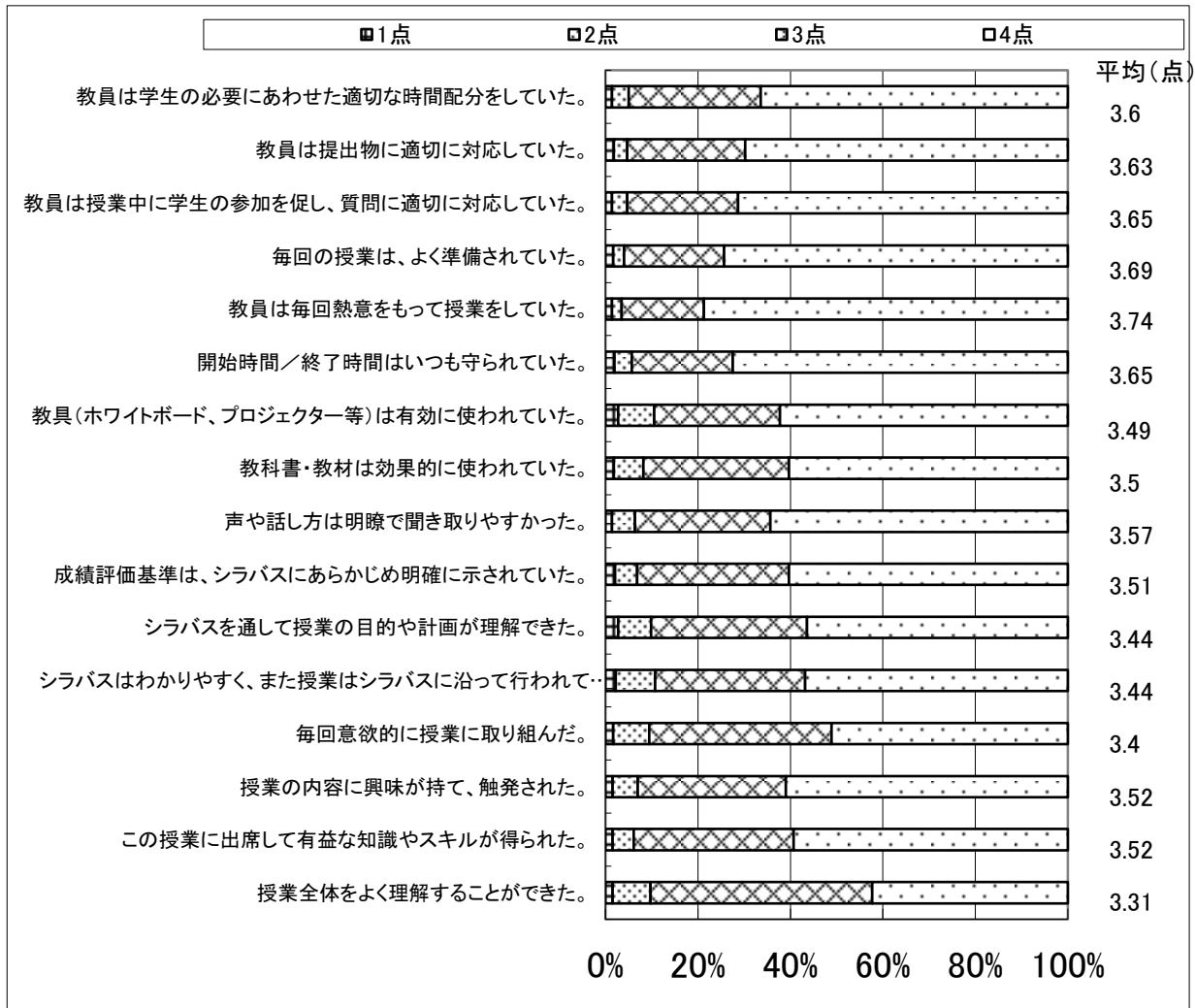
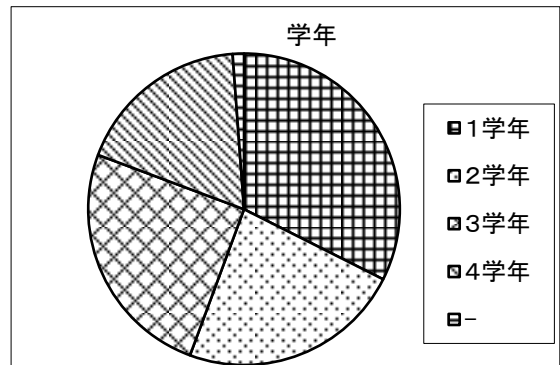
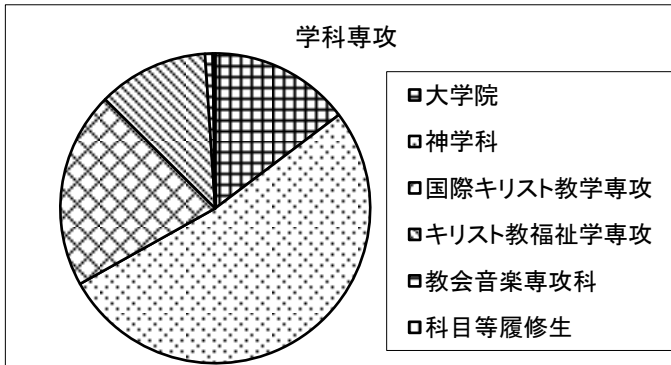
- ・学生が個々の目標を設定し、それをどのように達成したかを通して評価してはどうか。
(学生が毎年書く学修ポートフォリオを活用する。)
- ・基礎演習の最初の全体クラスで、ディグリーポリシー等について説明する。
- ・各クラスの中で、ディグリーポリシー等のスピリットを確認することが必要なのではないか。
- ・ディグリーポリシー等を教員で共有し、常に確認することが必要。
- ・スクールスピリット、学校に対する学生の気持ちをどのように高めるか。
- ・スクールアイデンティティをどのように持ってもらうか。
- ・学校に対する思いがどのように変わっていくかを知る事が必要なのではない。
- ・組織神学クラスを強化するのはどのようにしたらよいか。今の枠組みをどのように変えていくか。
- ・学生の科目に対するエフォートのバランスが「聖書言語」にかたよっているのではないか。
- ・神学専攻のアイデンティティがすこし弱くなっているかも知れない。改善の必要性がある。

学生による授業評価アンケート
—春学期・秋学期・冬学期・通年—

結果と講評

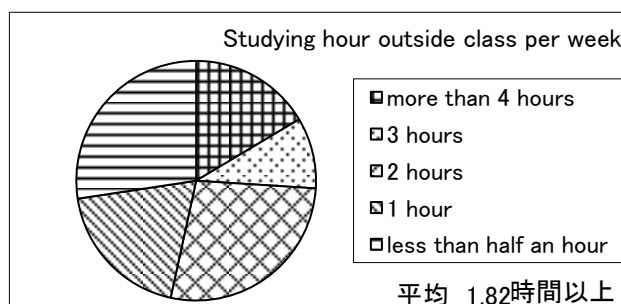
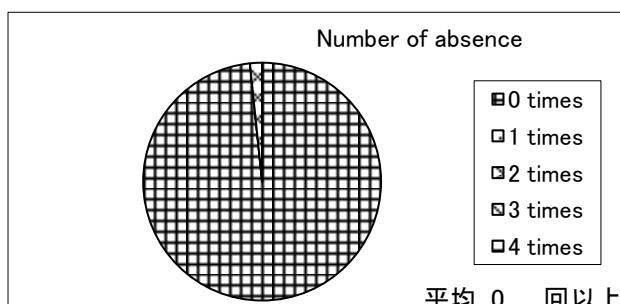
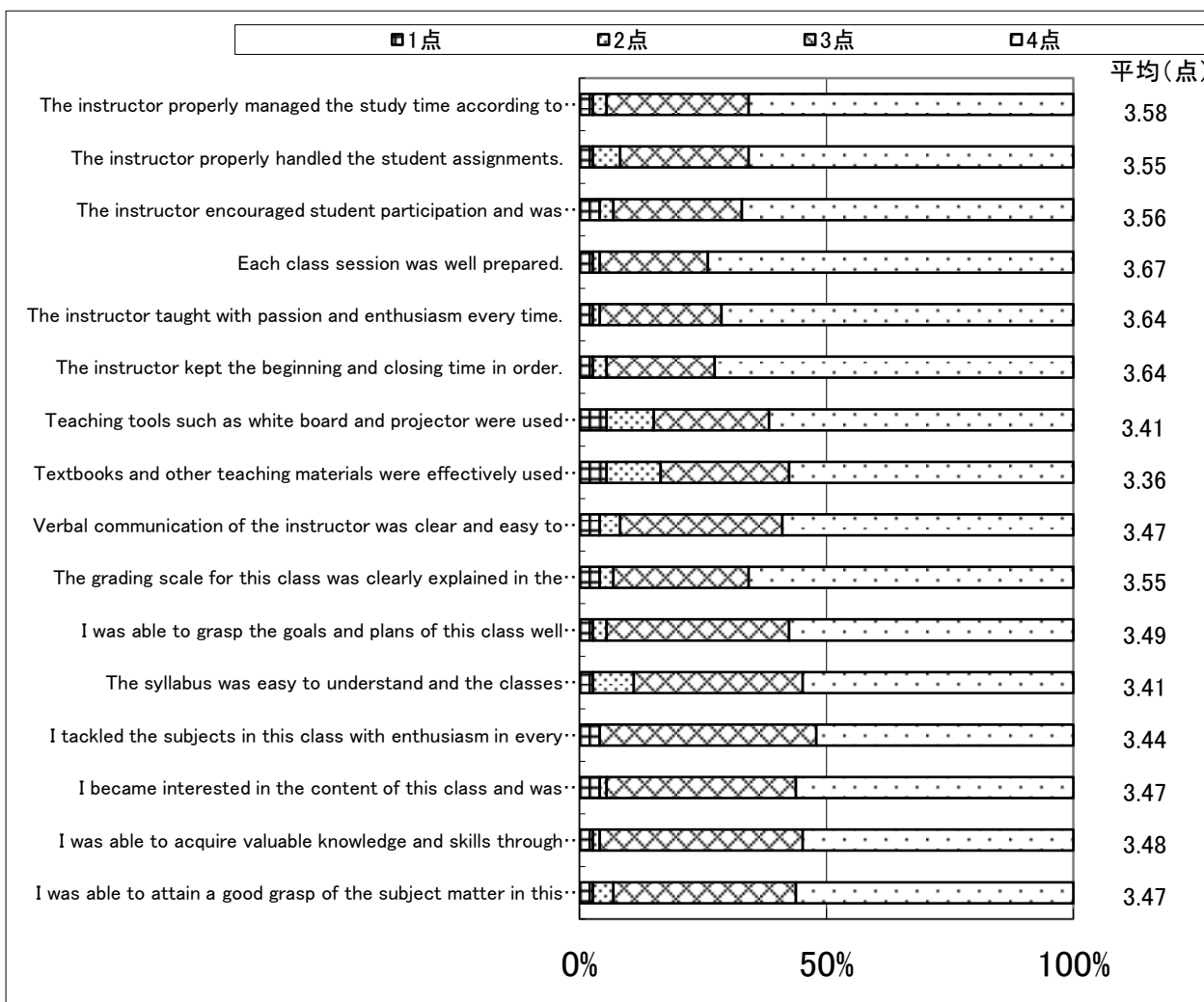
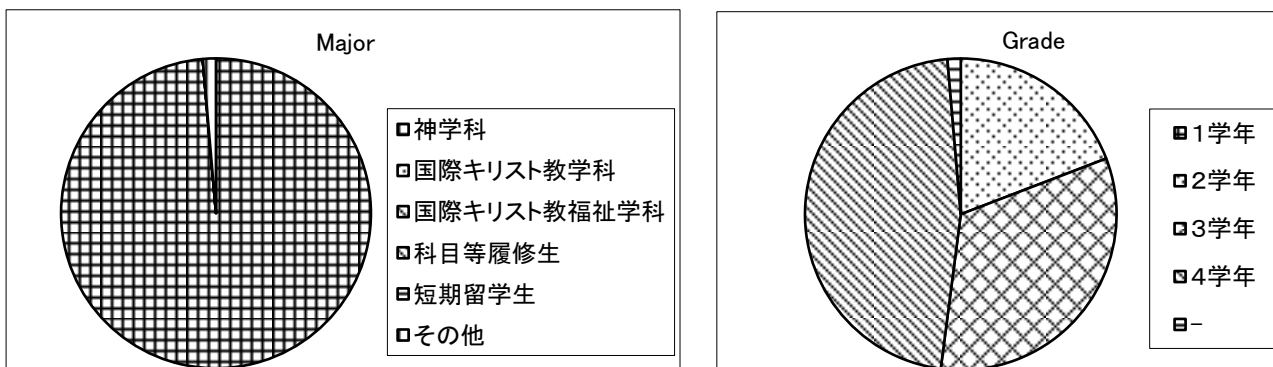
2013年度授業評価アンケート結果

学期 春学期
科目名 日本語科目全体



2013 Class evaluation result

Term 春学期
Course Title ACTS-ES科目全体



神学部

学生の授業への積極的取り組みの一指標である授業外学修時間が、平均で1科目各週1.26時間（研究科2年を含む）であった。

11年春学期 1.16hr（学部のみ）

12年春学期 1.17hr（含、研究科1年生）

13年春学期 1.26hr（含、研究科1・2年生）

研究科が2学年となって全体的に平均を押し上げたことも考えられるが、若干ではあるが授業時間数は押し上げられていると言えるかもしれない。とは言え、一科目あたりの学修時間が0.5hrから2.7hrの格差は大きすぎると言わざるを得ない。

コア・教養

総じて評価は高かったが、授業外学習時間の目標が達成されていない部分が大きな課題であろう。また複数教員によるティーム・ティーチングクラスの「流れ」や「まとまり」に対する懸念もコメントから伺えた。一方向的授業より、学生の参加を促すアクティブ・ラーニング型授業に対してのポジティブなコメントが多く目についた。

神学科

概ね、大きな問題もなく、学生たちが神学科の授業を評価してくれていると思います。勿論、科目や担当教員によって評価に多少のばらつきはありますが、この人数ですので、科目および教員というよりも履修している学生たちを反映しているばらつきと思われます。平均値は3点から4点の間で、3点に近い場合から4点に近い場合と妥当な評価であり、ほぼ妥当なレベルで教員が授業を実施しているものと判断します。

ACTE-ES

- Evaluations scores indicate a reasonable level of satisfaction, though scores were slightly lower than the Japanese track for all but 4 of the questions.
- Average of weekly study hours (1.82) still seems a bit low.
- Most significant comment: library resources in a biblical studies course were insufficient for reports
- Four significant problems with evaluations: (1) it appears that most or all seniors did not respond; (2) there was an unusually low response rate for some Japanese courses (technical problem?); (3) for at least one course, some students evaluated a different course; (4) generally speaking, the numbers and comments are not insightful

国際キリスト教学専攻

大きな問題はないと考察される。非常勤講師が担当して下さっているクラスの評価が抜群に高く、また学生たちの学習時間も一番、長かった。学習時間が1時間を切るクラスがいくつかある点、課題の出し方や学生のクラス参加などに改善の余地があるかもしれない。

キリスト教福祉学専攻

全体的に、難しい専門的な内容をわかりやすく丁寧に教えてもらったという意見が多かった。介護福祉は実践の学問というように、教員の体験談は学生が理論を具体的にイメージするのに効果があったといえる。また授業形態は、講義、演習を問わず受身で聴くのではなく、質問やディスカッションの機会を望んでいることが伺えた。

改善点だが、教員により授業に熱が入りすぎ授業時間をオーバーするようだが、学生の集中力を保てるような配慮をしていきたい。

神学研究科

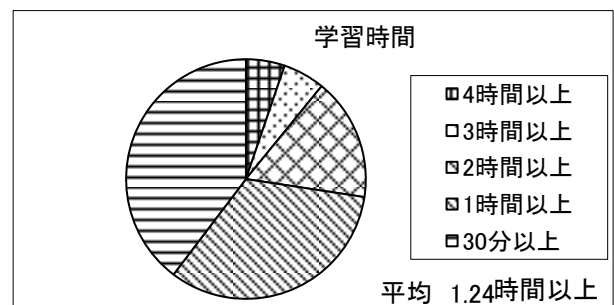
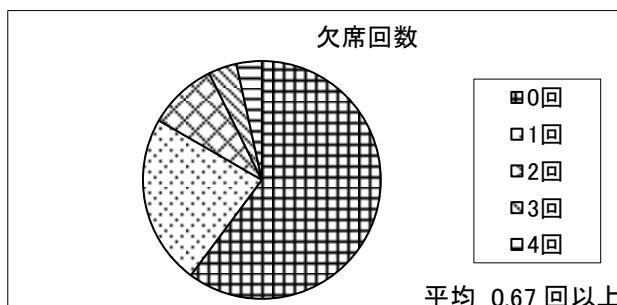
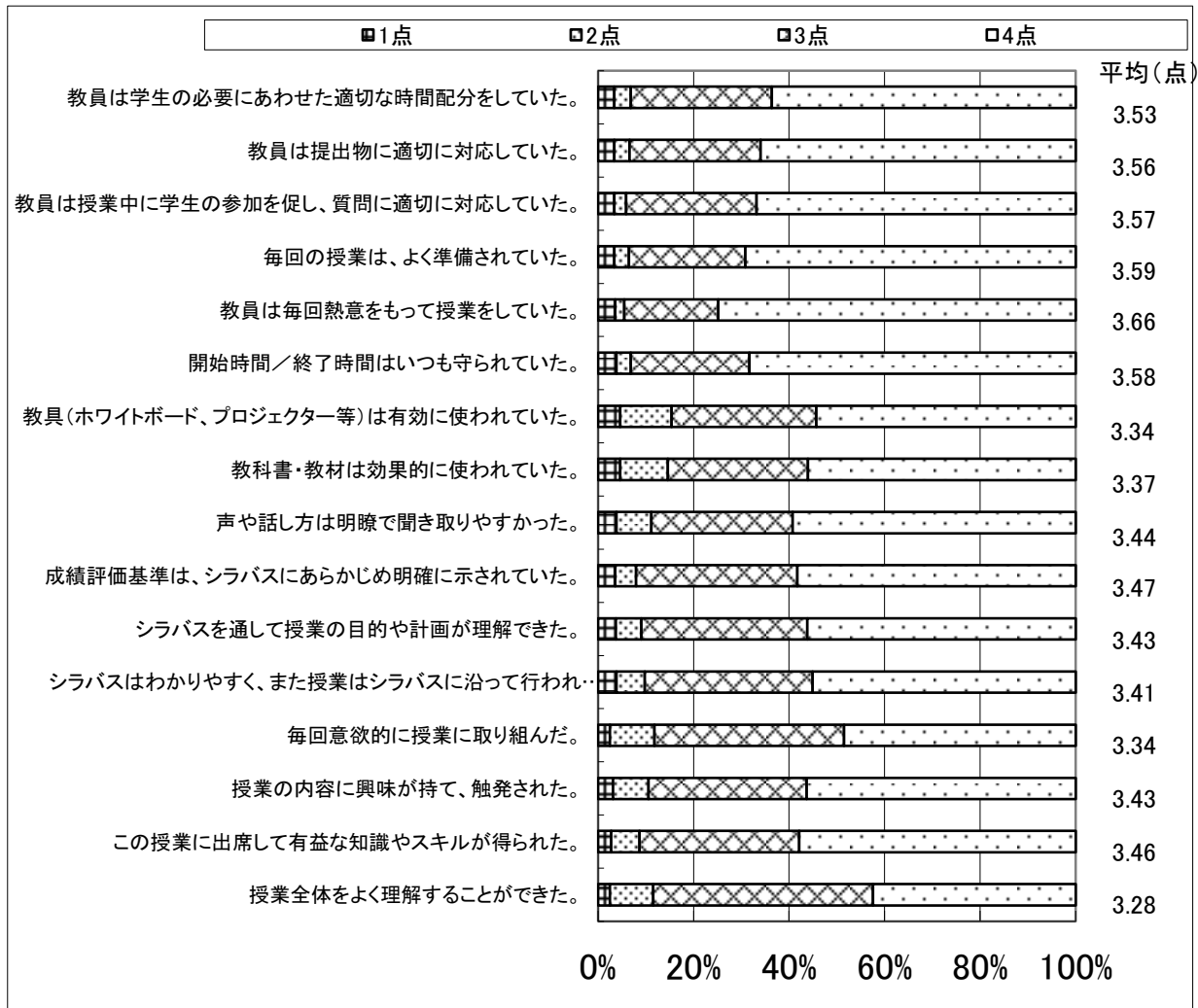
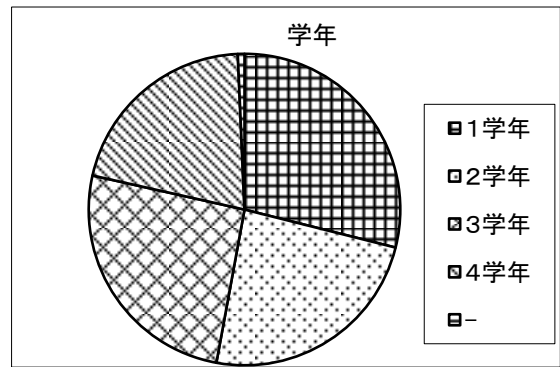
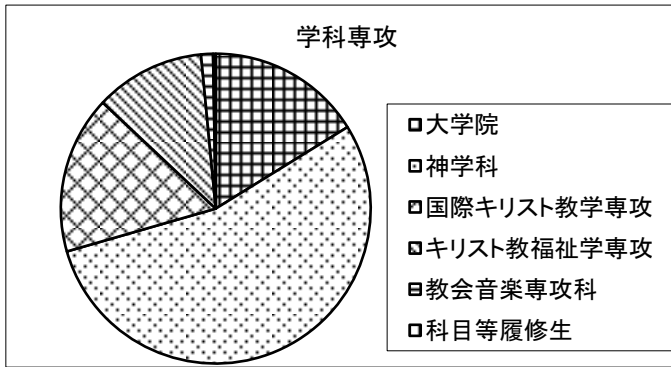
出席率と評価において大きな問題はないように思われる。学習時間は 2.44 時間から 0.64 時間までかなり差がある。説教演習は不定期であることもあり欠席がやや多い (0.69、0.54)。講義科目と演習科目で設問項目が適切でない面もあるように思われる。

教会音楽専攻科

今年度、3 人の入学者が与えられ、初めてフルに授業が展開されている。それぞれすでに履修した科目があるが、それでもかなりタイトなスケジュールとなっている。カリキュラムの組み方に今後工夫が求められる。

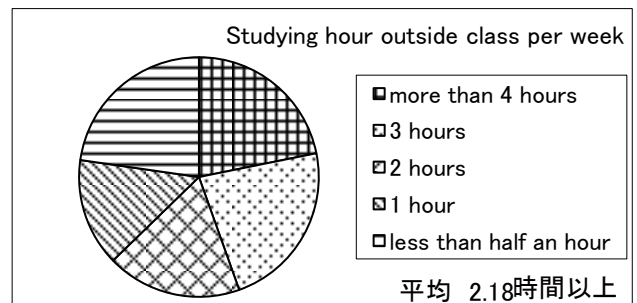
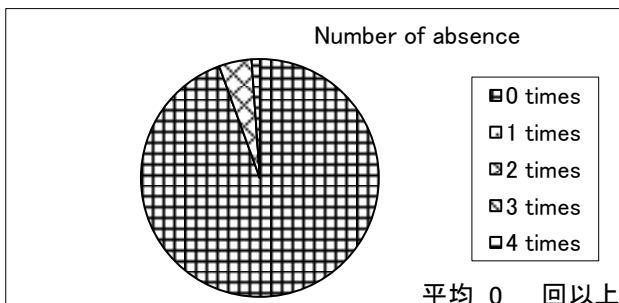
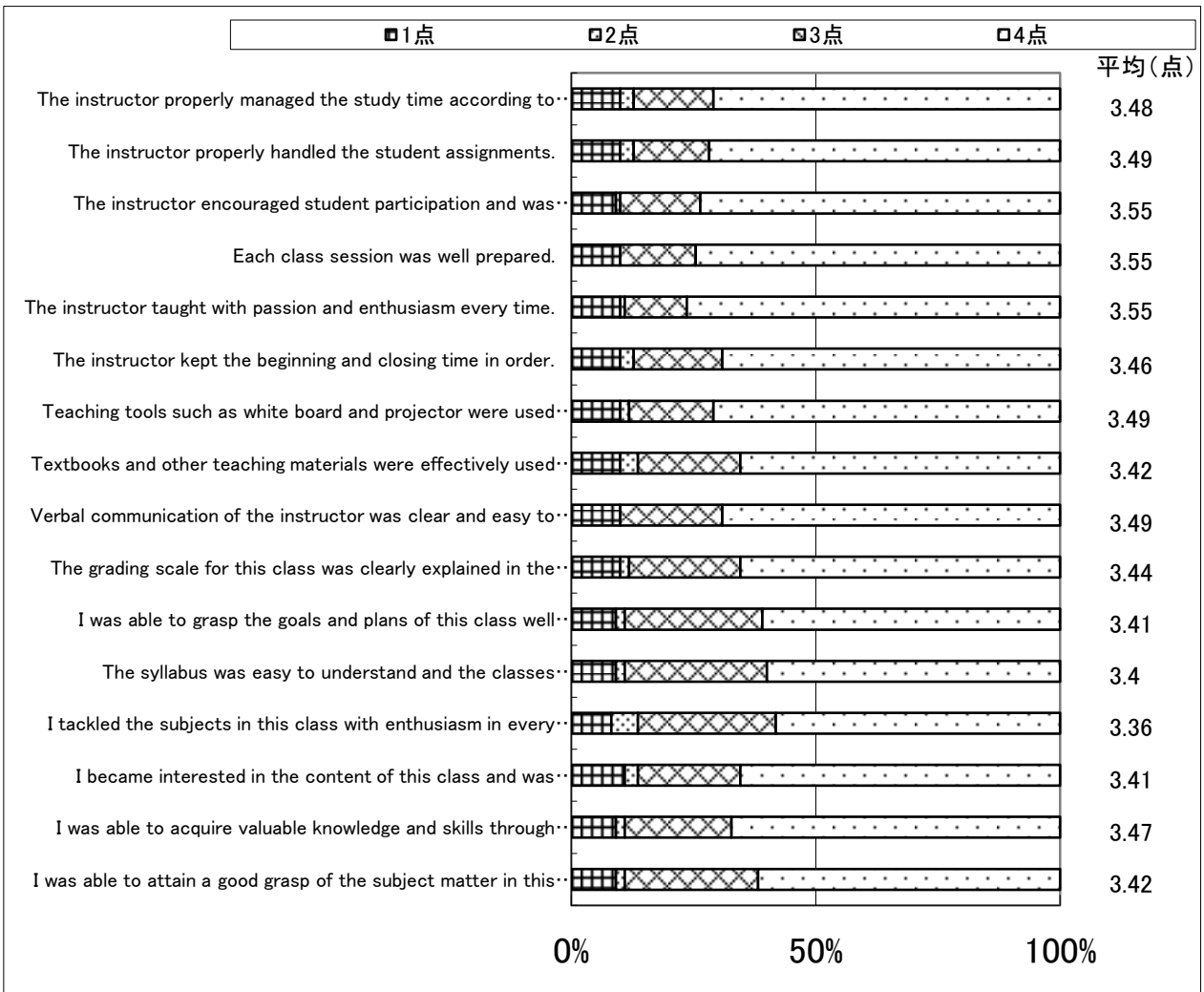
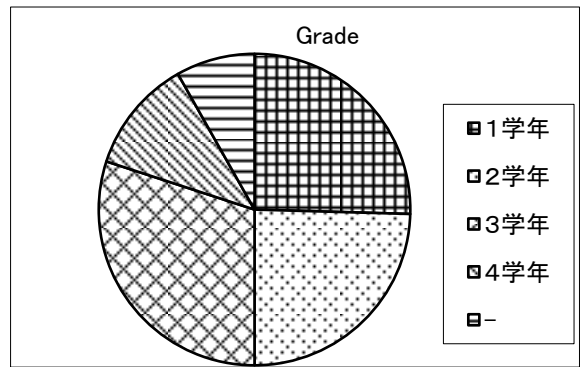
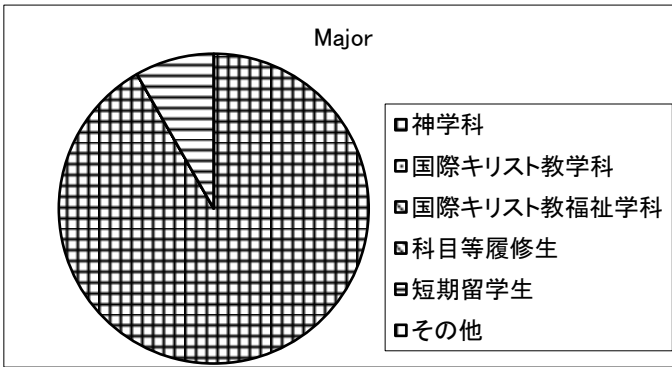
2013年度授業評価アンケート結果

学期 秋学期
科目名 日本語提供科目全体(平均)



2013 Class evaluation result

Term Fall
Course Title ACTS-ES (average)



2013 年度秋学期

学生による授業評価アンケート結果の評価

神学部

各学科・専攻・研究科とも、概して学生の評価は良好であるといえます。授業時間外学習については、以下の平均を参考にしてください。また、学年度末に出る学生ポートフォリオの結果と照合し、検討する計画です。

2012 年度	秋	ACTS-ES 2.05 時間	その他 1.12 時間
2013 年度	春	ACTS-ES 1.82 時間	その他 1.26 時間
2013 年度	秋	ACTS-ES 2.18 時間	その他 1.24 時間

コア・教養

全体的に学生の満足度は高い。科目の性質上、非常勤講師の割合が高いが、学生に好評のクラスが多い。全体的に授業外学習時間の問題が残るが、非常勤教員にも再度、この課題についてお知らせし、協力を仰ぎたい。授業時間確保に関しては、学生の課外活動との関連性もあり、その方面からの改善も必要であろうと思われる。

神学科

概ね、大きな問題もなく、学生たちが神学科の授業を評価してくれていると思います。勿論、科目や担当教員によって評価に多少のばらつきはありますが、この人数ですので、科目の内容、教員の資質および履修している学生の資質や興味など様々な要素が反映しているものと思われます。平均値は3点から4点の間で、3点に近い場合から4点に近い場合とに妥当な評価であり、ほぼ妥当なレベルで教員が授業を実施しているものと判断します。

ACTE-ES

- ・ The average of weekly study hours rose from 1.82 in the spring to 2.18 in the fall. The lowest for any class was 1.33, and the highest was 3.33.
- ・ Students expressed high levels of satisfaction with courses that help them to communicate more and better with Japanese (namely, Japanese language classes and Intercultural Communication).
- ・ Some expressed a desire to interact more heavily with Japanese students in certain integrated classes.
- ・ Students consistently express strong appreciation for meaningful interactions, discussions, etc., in certain classes, and some expressed a desire for more interactions in certain classes.
- ・ Some expressed appreciation for use of visual aids in certain classes (audio, video, etc.), and some expressed their desire for more visual aids in certain classes.

- ・ Some expressed their wish to receive more feedback regarding their work and grades in certain classes, and some expressed appreciation for the instructor' s feedback in certain classes.
- ・ Some complained that the work load in certain courses was too heavy.
- ・ Problems with evaluations:
 - (1) Anonymity has been compromised in at least one instance (one ACTS-es student in a class primarily for EAI students).
 - (2) Some students are copying and pasting the same comments into evaluation forms for multiple classes. Therefore, some of the comments will appear to be deeply thoughtful and constructive, but they may simply be canned responses.
 - (3) Some students have misunderstood the rating system (treating 1 instead of 4 as highest).

国際キリスト教学専攻

語学科目と専門科目両方とも学生の評価が高い。多読を軸にしたビッグイングリッシュプログラムが順調に進んでいることはうれしいことである。

キリスト教福祉学専攻

全体の傾向から、授業は各教員がわかりやすく教えるための配慮をしていることが伺えた。ただし、学生によってはわかりやすく教えてもらうだけではなく、「考える機会」を望んでいるので、知識伝達型の授業においても一方通行にならないように留意する必要がある。悪い点としてはテキストの使用法と時間配分に課題が見えた。キリスト教福祉学専攻カリキュラムでは同じ科目名で番号が連なったものも多く、中には直接テキストを使わず資料で対応する科目もある。ただし、学生には介護福祉士養成カリキュラムに沿ったテキストの購入を前提としているため、使用しない場合は事前に説明するなどの対策をとっていきたい。

神学研究科

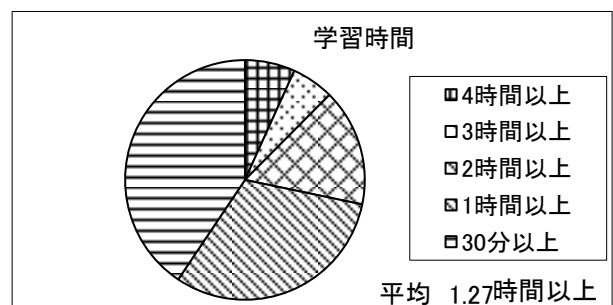
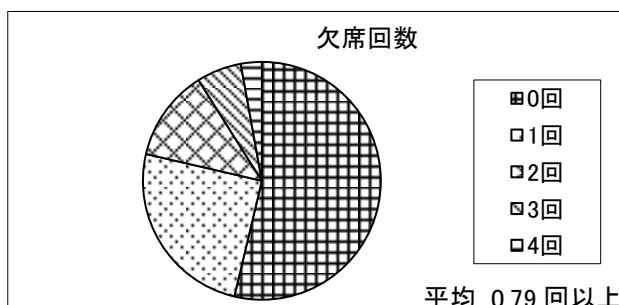
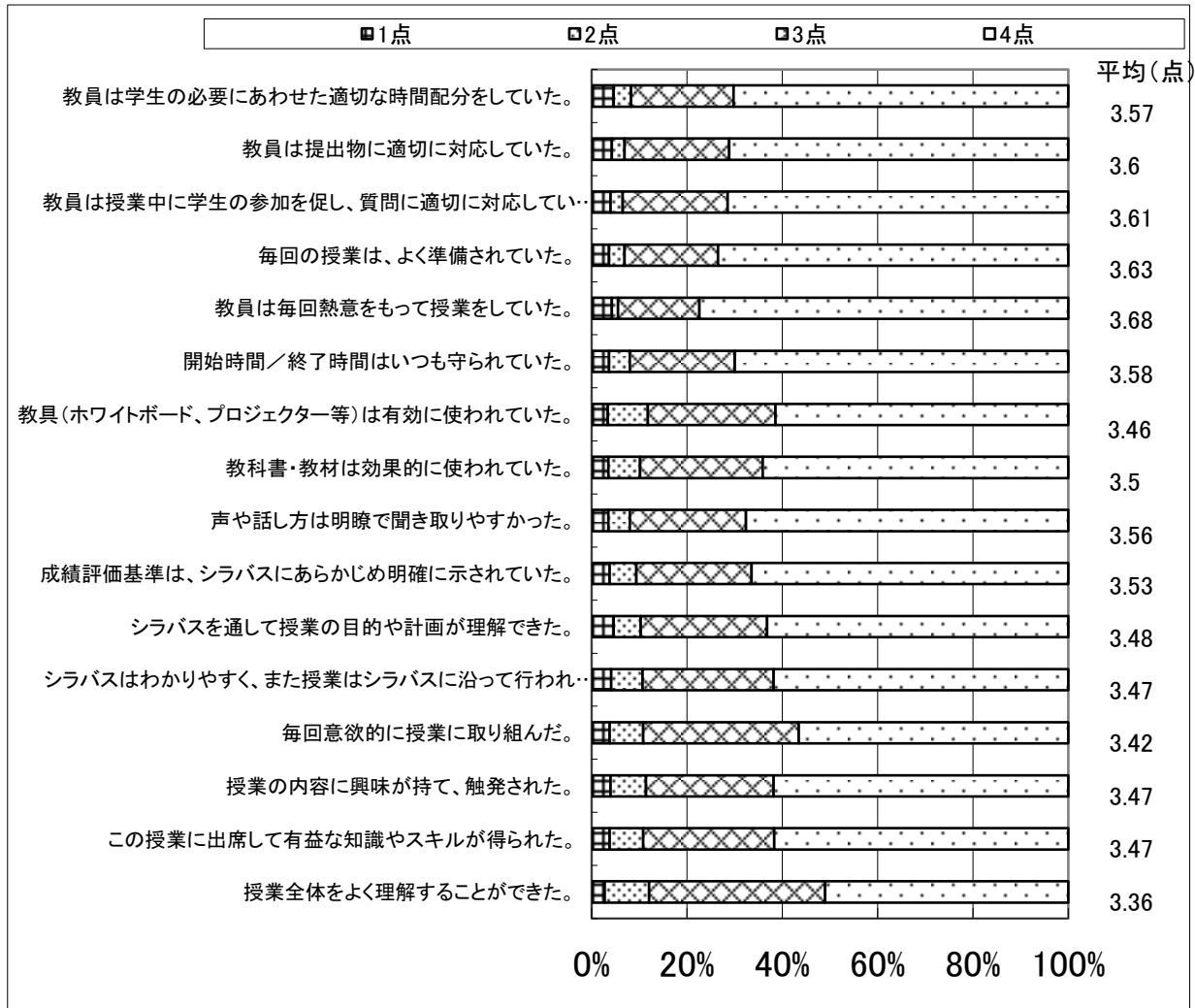
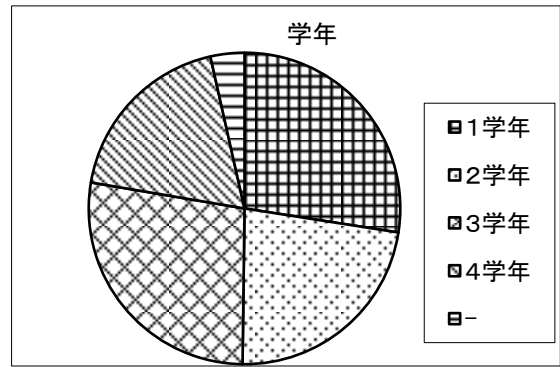
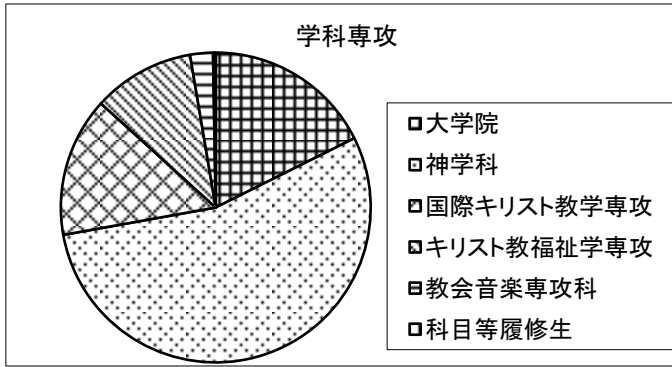
それぞれの科目の特性に応じた学生の反応が見てとれるアンケート結果であった。たとえば英文資料が多ければ理解が難しいという意見がある。学生の理解力を勘案しつつの訓練が期待される。フィールド・トリップの好評はアクティブ・ラーニングの有効性を示しているように思われる。

教会音楽専攻科

学生による授業評価は、高いものが多かった。欠席もほとんどなく、学生の取り組む姿勢の高さが伺われた。唯一、実践音楽実習について、改善の余地があることが確認された。次年度に生かしたい。

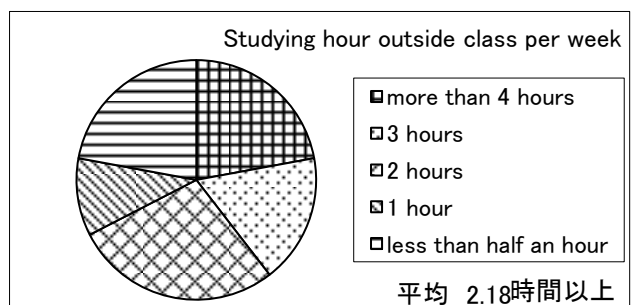
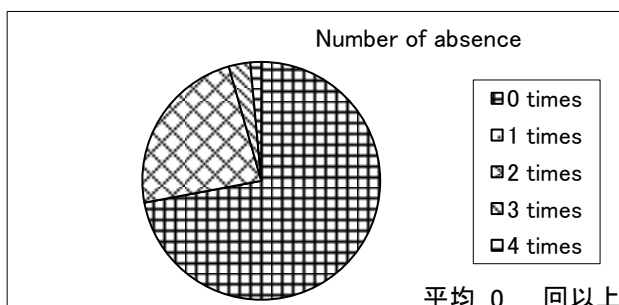
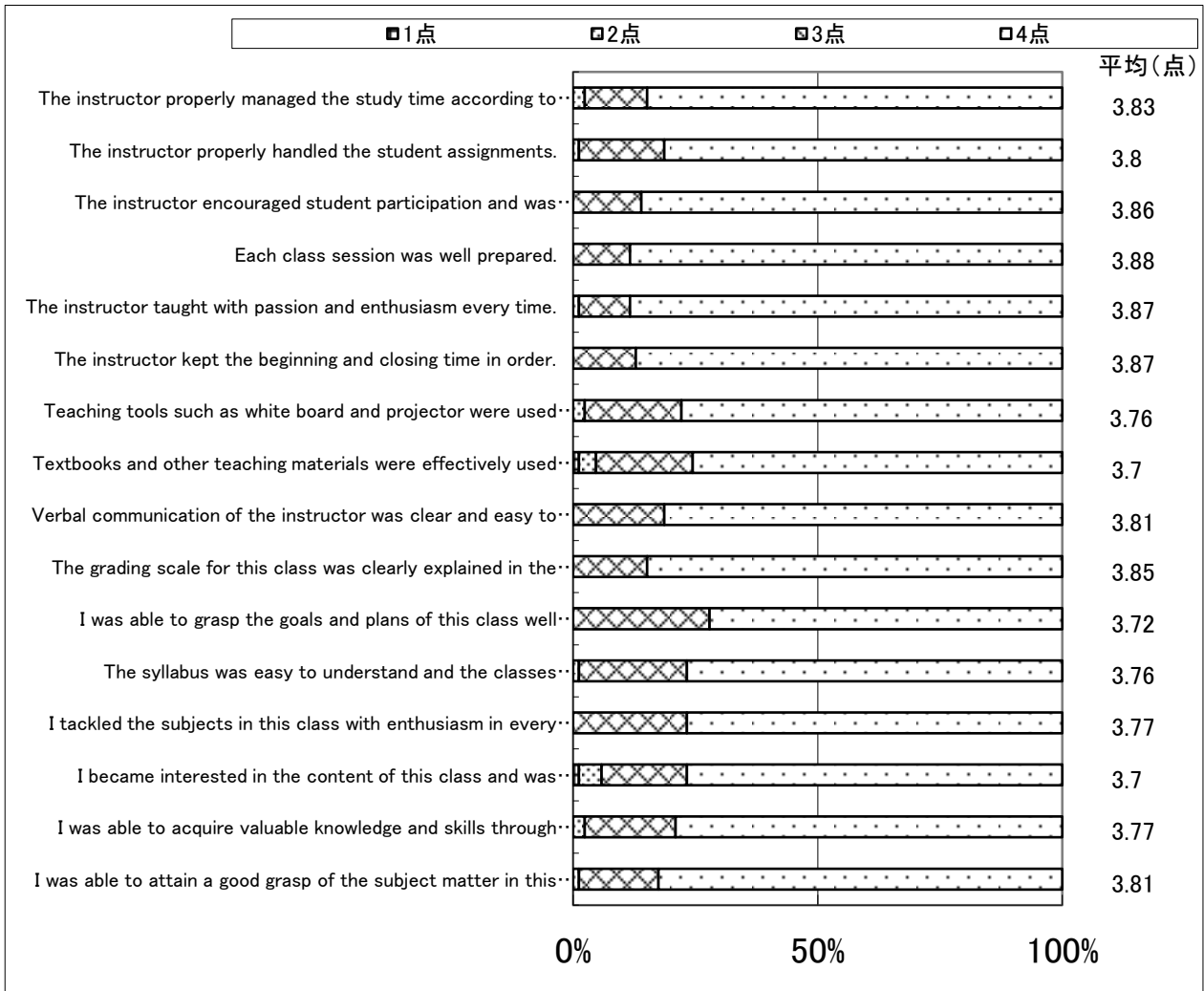
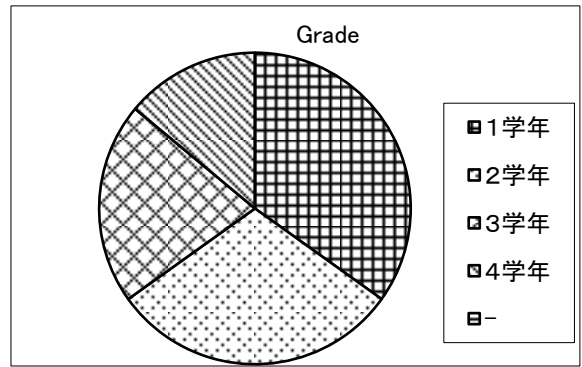
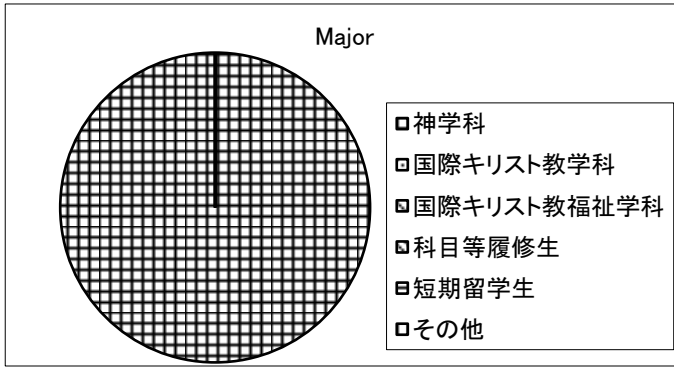
2013年度授業評価アンケート結果

学期 冬学期, 通年
科目名 日本語での提供科目全体平均



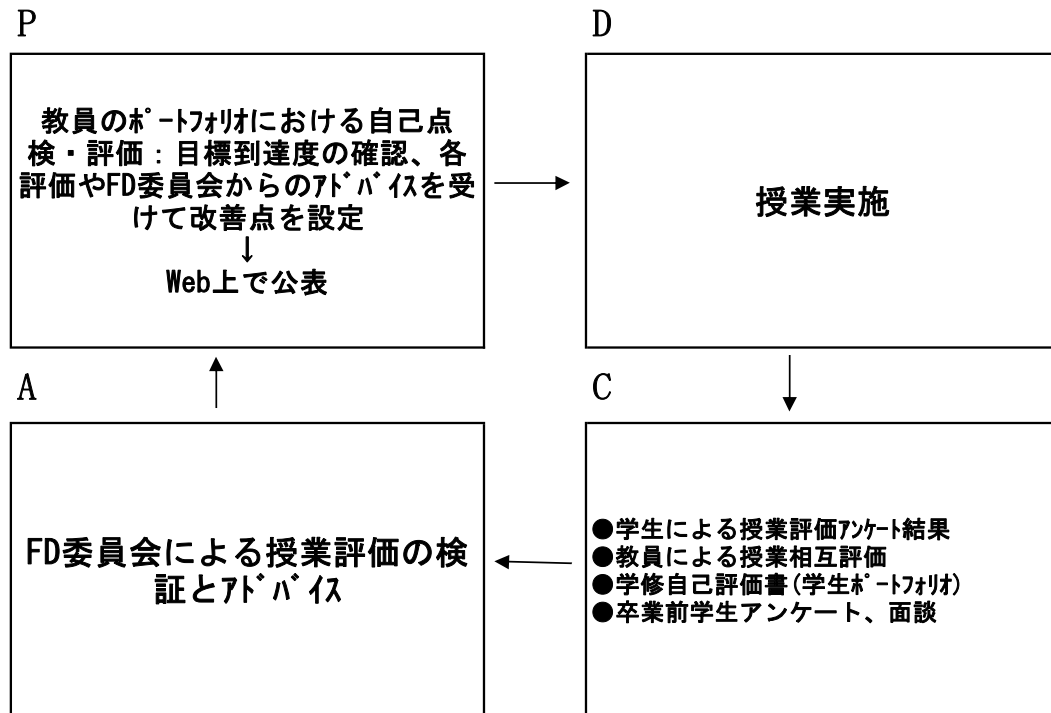
2013 Class evaluation result

Term Winter
Course Title ACTS-ES (average)



授業改善のための PDCA サイクル

TCUにおける授業改善のPDCAサイクルは以下になります。先生方におかれましては、「改善」「計画」「実施」「評価」のサイクルが循環するよう実施をお願いいたします。

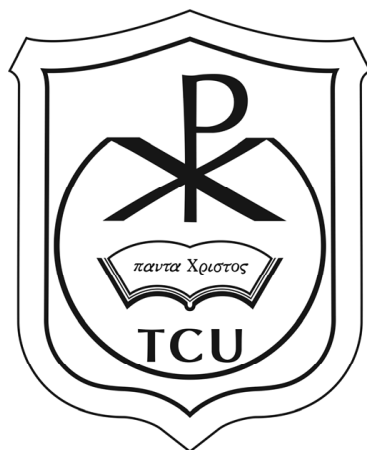


2013年度 FD 活動一覧

日時	タイトル	講師	場所	対象	参加者数
H25. 6. 4	第1回ファカルティーフォーラム 「教会においてワーシップソングと伝統的教会音楽をどのように統合したらよいか」	ジョシュア佐佐木	大会議室	全教職員	21
H25. 8. 28	教員研修会 「神学部学生の主体的学びについて」	岡村直樹	FCCホール	全教職員	22
H25. 10. 1	第2回ファカルティーフォーラム 「紀要合評会」		大会議室	全教職員	21
H25. 10. 22	ワークショップ 「学修ポートフォリオについて」	森恵子	大会議室	全教員	22
	授業評価アンケート講評会（春学期分）	小林高德			
H26. 2. 4	授業評価アンケート講評会（秋学期分）	小林高德	大会議室	全教員	20
H26. 3. 5	精神ケア学び会 「若者の食について」	発表者： 杉谷、辻中、鍵谷	バルナバホール	全教職員	17
H26. 3. 14	第3回ファカルティーフォーラム 「授業改善～授業相互評価・自己点検評価より～」 「学科・専攻会議」	岡村直樹 井上貴詞	大会議室	全教員	17

2013 TCU Special Lecture

2013年度 TCU 特別講義



*'The "Individualism" of
the Gospel of John'*

ヨハネ福音書の「個人主義」

Dr. Richard Bauckham

(Professor Emeritus, University of St Andrews)

リチャード・ボウカム博士

(セント・アンドリュース大学神学部名誉教授)

Date: Wednesday, June 19, 2013

Time: 13:00 – 15:30

2013年6月19日(水)午後 1:00 – 3:30

第2回ファカルティーフォーラム

「紀要合評会」

『キリストと世界 23号』

2013年10月1日 (火)15:40-18:00

於 大会議室

山口陽一先生、評者：加藤喜之先生

『柏木義円の教会論』

岡村直樹先生、評者：篠原基章先生

『キリスト教大学における震災ボランティア活動と宗教心の発達

：mission系学校におけるサービスラーニングの観点から』

中澤秀一先生、評者：ショート・ランドル先生

『神学大全による介護福祉士の専門性に必要な教育内容を中心に』

・ ・ ・ ・ ・ 休憩 ・ ・ ・ ・ ・

小会議室に茶菓の用意があります

井上貴詞先生、評者：片岡政子先生

『介護支援専門員に求められる実践能力の研究 II

：インタビューと事例の分析からの考察』

森恵子先生、大和昌平先生

『教会ベースのゴスペルクワイヤ、その現在と未来

：アンケート及びインタビュー調査結果から』

2013 年度ファカルティー・ディベロップメント活動報告

2014年9月1日 発行

編集・発行 東京基督教大学
〒270-1347 千葉県印西市内野3-301-5
電 話 (0476)46-1131
FAX (0476)46-1405
<http://www.tci.ac.jp/>

印刷・キクラ印刷(株)
©東京基督教大学2014年